

The region agriculture leader of Wakayama Prefecture

和歌山県
和歌山県農業士会連絡協議会

和歌山の 農業士

2017
3
March

地域農業をリードする熱き農業者達

第8号



はじめに

本誌『和歌山の農業士』は、和歌山県の地域農業を牽引するリーダーとして知事に認定された『農業士』が、互いの活動を共有するとともに、関係者の皆様や一般の方々へも、広く積極的に情報発信していくため作成しています。

農業士が長年の農業経験で培った経営観や、これからの農業にかける熱い想いを紹介する内容に加え、各地域で展開される農業改良普及活動や、農業士会としての取り組みなどを内容に盛り込んでいます。

農業に関係する皆様方には、是非、ご一読頂き、地域農業の実情や農業経営の現状等について、ご理解を深めて頂ければ幸いです。

<巻頭言>

- 夢見る夢子 (和歌山県農業士会連絡協議会 副会長 新岡 愛) 1
産地に貢献する研究機関として (和歌山県果樹試験場かき・もも研究所 所長 島津 康) 2

<私の農業>

農業士達がこれまで培った自身の経営や活動を紹介

- みかんの品種構成を考えて (和歌山市 地域農業士 藪 正隆) 3
農業の雇用創出産業化を目指して ～選択肢を増やして社会を豊かに～
(紀の川市 青年農業士 小川 真司) 5
安定した所得を目指して (橋本市 地域農業士 木下 善久) 7
人との縁を大切にしたい みかんづくり ～コミュニティが支える大規模栽培～
(湯浅町 指導農業士 森 一洋) 9
スターチス専作で (御坊市 指導農業士 鈴木 章博) 11
農業も加工活動も楽しんでいます (田辺市 指導農業士 高垣 せり) 13

<お知らせ>

- 農林水産省のメールマガジン紹介「農業担い手メールマガジン」 15

<農業に懸ける想い>

青年農業士をはじめとする若い世代が、農業への熱い思いや取り組みを紹介

- ブランドを守る大根作り (和歌山市 青年農業士 山崎 吉則) 16
イチゴとともに歩いていく ～これまでも、そして、これからも～
(紀の川市 青年農業士 奥 佳樹) 17
柿を中心とした果樹間複合経営 ～四郷の串柿 伝統農業を守る～
(かつらぎ町 青年農業士 西山 幸佑) 18
農業に真摯に取り組む (有田川町 青年農業士 林 宏樹) 19
栽培と販売の効率化に向けて (みなべ町 青年農業士 栗山 大介) 20
安定した農業経営のために (上富田町 地域農業士 山口 明宏) 21

<県農業大学校学生です。>

- 農業大学校1年生の自己紹介&近況報告(第2回) 23

小杉 里緒 菅谷 祐介 谷口 統哉 玉置 あぐり
八百 悠輝 山本 優

巻頭言

夢見る夢子

和歌山県農業士会連絡協議会

副会長 新岡 愛



「強い農業を作る！」 農業分野で強いとは、一体どういう農業でしょうか。

大量生産ということであれば、中山間地では不可能だと思います。「安全安心」という日本農産物のセールスポイントも数年前から揺らいでいます。そんな中で「農業の六次化」が注目されるのは、生産だけの農業では稼げなくなってきたということでしょうか。

私の家は果樹農家です。両親は、一足早く六次化、法人化の扉をあけました。梅、桃、ブドウ、栗、柿、キウイフルーツ、みかん、ジャバラを生産、加工、販売しており、国の推し進めている「六次化」を実践しています。生産物を加工することで、通年雇用が可能となり、農繁期の人材を確保するはずでしたが、「六次化」した農業で経営するのは難しいです！

何が難しいのかと言いますと、労力配分です。特に、農繁期は仕事が重なりすぎて、一体自分が何をしているのかわからなくなります。

生産や加工の暇な時期は耕作放棄地の復活作業をして、畑の規模を拡大しています。しかし、畑を作る、増やすは簡単ですが、加工して出荷する方が優先のため、タイミングよく畑の手入れができません。加工の仕事をやめてしまえば畑仕事の能率は上がりますが、加工なしで周年雇用を確保するのは難しいです。

また、農家で作った商品（青果物と加工品）の単価を上げるためには、工夫が必要です。なぜなら、生産と加工の両方を行うと、それぞれの機械や設備を使用する期間は短くなるため、結果、コストが高くなるからです。そして、このコストを埋めるためには、商品に付加価値を付ける必要があります。数年前の健康増進法の改正でできた「機能性成分表示」の制度がビジネスチャンスとなるのではと期待をしていましたが、表示するためには多くの手続きと体制づくりが必要で、時間もお金もかかり、個人経営の農家では手が出せませんでした。もっと簡単な「ビタミン、カリウム等が平均でこの程度入っていたら、生活習慣病予防に効果がある」程度のシステムにしてほしかったです。

両親の口癖は「いつか農業の時代がやってくる！」です。

私の畑に隣接する畑の主は70歳以上の高齢の方が多く、手入れされていない畑、そしてジャングルになりかけた畑も数多くあります。周りのジャングルが私の農地に迫って来ています。こんな農地が増え続ける中で、どんな素晴らしい農業の時代が来るか、私にはわかりません。

わからないけど、夢見ます。

私の農地が、100年先、1000年先でも生き続けていることを。

巻頭言

産地に貢献する研究機関として

和歌山県果樹試験場かき・もも研究所

所長 島津 康



農業士の皆様には、常日頃、地域の中心となって農業を牽引し、リーダーとしてご活躍されておられますことに心から敬意を表します。また、かき・もも研究所の業務に多大なご協力をいただいておりますことに厚くお礼申し上げます。

さて、当研究所は昭和 28 年に和歌山県果樹園芸試験場紀北分場として設置され、平成 24 年に現在の組織となり、今に至っています。近年の消費嗜好の多様化と高級化、環境問題と食の安全安心、生産者の高齢化等に伴い、研究機関には多様な課題への対応が求められています。このような中、当研究所では紀北地域の主要果樹であるカキ、モモを中心に、「高品質な果実作り」、「低コスト省力軽労化」、「環境に優しい果実作り」、「優良な新品種の育成」の四つの研究テーマのもと、試験研究を実施しています。

県内の試験研究機関に求められる大きな役割は、産地の課題を解決して発展、活性化につながる技術の開発であり、そのためには現場と密接に連携しながら取り組むことが必要です。当研究所ではこれまでも産地に密着して研究を進め、カキでは従来の炭酸ガス脱渋法に比べて短時間に処理でき、日持ち性の向上する CTSD 脱渋技術を実用化しました。また、有孔ポリフィルムと低透湿性段ボールの利用による軟化防止技術を開発し、産地に普及

しています。モモでは改植時の連作障害対策として、大苗の利用や低濃度エタノールと活性炭の利用による連作障害回避技術を開発しました。また、モモの新病害である果実赤点病の防除対策を確立し、現場で活用いただいております。これらの研究は現場技術者や生産者の皆様方と一緒に進めての取り組みがなくては成しえなかったと考えます。現在は主に、極早生カキの生理落果対策、晩生モモの主力品種である川中島白桃で問題となる水浸状果肉褐変症対策、昨年多発して大きな問題となったモモせん孔細菌病対策など、安定生産に向けた技術を開発中です。また、県オリジナル品種開発を目指して、カキ、モモの新品種育成にも取り組んでいます。

我が国では今、「攻めの農林水産業」実現に向けて、農業競争力の強化を目指した輸出促進、農地の集積・集約化等、多くの取り組みが進められており、本県の農業も重要な局面を迎えています。カキ、モモ産地を含めて、県内で新たな解決すべき課題が発生すると思われる、当研究所もさらに努力しなければならないと考えます。これからも、農業士の皆様方をはじめとした県内の各方面から、解決すべき問題を教えていただき、ご意見をいただきながら試験研究に取り組むことで産地の発展に貢献できればと考えていますので、よろしくお願いいたします。

私の農業

みかんの品種構成を考えて

和歌山市 地域農業士

藪 正 隆



1. はじめに

就農前は銀行員としてサラリーマン生活を送っていました。当時は土日に農業の手伝いをする程度でした。子供の頃や学生時代に農作業の手伝いをしていたこともあり、土日の農作業は特に苦になる事はありませんでした。

就農するきっかけは平成18年に勤務していた銀行が他行と合併することが決まったことです。その時は父親の体力も落ちてきたこともあり、脱サラして就農する良い機会だと考えました。元々、将来的には就農しようと考えていましたから、就農が早まっただけという感じでした。これで我が家の労働力は親夫婦と私達夫婦の4名となりました。

ずっと農作業は手伝っていましたが、やはり技術面では父親には及びませんでした。就農してから2～3年は剪定等技術が必要な作業は親が中心で行い、その他の力仕事などは私が行っていました。それから父親に教えてもらいながら技術を向上させていきました。

2. 農業経営の特徴

現在の我が家の品目構成は収穫期順に梅、タケノコ、イチジク、柿、温州、晩柑類です。作業の平準化を考えての品目構成ですが、収穫が重なる9月が最も忙しい時期となります。多くある品目の中でも経営の主体は温州みかんです。そのみかんはリスク

農業経営の概況

○作付品目と面積	
温州みかん	100a
晩柑類	20a
水稻	50a
イチジク	15a
柿	10a
梅	10a
タケノコ	30a
○労働力	
家族	4人
雇用（収穫時）	3人

分散や農作業の平準化のために品種は極早生から晩生までを導入しています。昨年は中生に浮き皮の発生がありました。異常気象の影響が以前よりは作りにくくなっているように思います。



イチジクほ場にて

出荷はJAわかやまを通して関東へ出しています。また、一部は地域の5名の仲間と組んで個撰共販で京都へも出荷しています。梅、イチジク、柿は全量JAへ出荷しています。

梅は青梅で出荷しています。イチジクは県内主流品種の榊井ドーフィンを栽培しています。柿は刀根早生を栽培しています。より早く収穫できる品種もいくつか出ていますが、品質が安定していることを考えて刀根早生より早い品種を追うことはしていません。

地域特産のタケノコは地元の組合を通して出荷しています。

水稲は自家消費分を除いて業者さんに販売しています。



タケノコほ場にて

3. 今後の経営

所得の安定化が経営方針の柱です。温州みかんは一部まだ古い品種が残っており、品種構成を考え、ゆら早生など評価が高い品種に改植を進めています。補助事業等を利用しながら、経営に影響が出ない程度に徐々に改植を進めています。

イチジクには全国的に問題になっている株枯病の発生も見られます。イチジクは比較的根が浅く、植え替えも容易であることから、発生した畑を一旦水稲に戻して、再度イチジクを植える輪作体系をとって、病害回避をしています。また、株枯病抵抗性台木にも注目して有効な台木の導入は積極的に行います。

4. おわりに

長男が県農大を卒業後にJAファームわかやまに就職就農して6年になります。業務として白菜、キャベツ等の露地野菜を中心に栽培を行っています。技術面も向上しており、中心的な役割をしています。

今すぐとはいきませんが、将来的には後継者として経営を引き継いでもらいたいと考えています。

そのためにはより経営の安定化を進めたいと思います。

私の農業

農業の雇用創出産業化を目指して ～ 選択肢を増やして社会を豊かに ～

紀の川市 青年農業士

小川 真司



1. はじめに

大学、大学院での研究生生活を経て、2006年に私はリターン就農しました。4年目には、経営移譲を受け、経営主体として、父母の助けを得ながら、スタッフと共に、日々営農に勤しんでいます。

作付品目と面積にみる、10年間の変遷の特徴としては、①果樹から野菜・花卉への転換、②常備菜の拡張の2点が挙げられます。そして、これら2点に取り組んできた背景には、「農業で雇用を生み出したい」という想いがありました。①は年間作業の平準化、②は販売単価の安定を図る上で有効であり、これらに取り組むことによって、今日の雇用創出につながっています。

2. 農業経営の特徴

1) 人材育成

農業の雇用創出産業化には、新たな担い手の育成が不可欠です。そこで、常時雇用のうち、1人ないし2人を研修生として（待遇は常時雇用同等）、採用しています。研修生は年齢や習得レベルを考慮して、1年から3年の経験を積んだ後、独立して営農を開始します。これまでに6人が独立し、新たな担い手として活躍するとともに、それぞれが雇用を生み出しています。

自身がさらなる大規模化を図り、大きな雇用元になるよりも、新たな担い手を輩出し、雇用元の数を

農業経営の概況

○作付品目と面積	
ハボタン	120a
タマネギ	320a
トマト（ハウス）	38a
キュウリ（ハウス）	22a
その他野菜	30a
柿	120a
○労働力	
家族	4人
常時雇用	5人
臨時雇用	のべ400人

増やすことを上策と考え、現在の雇用形態を採っています。今後、小川農園から生まれた点がさらに新たな点を生み、線へ、面へと広がっていくことを期待しています。



小川農園を支えるスタッフ

2) 契約栽培

雇用の安定には、販売価格の長期的な安定も欠か

せません。そのため、私は契約栽培を経営の柱としています。常備菜を拡張してきたのも、契約が結びやすいからです。

契約にあたって、私は2つの点を重視します。ひとつは、取引先が農産物を評価する際の視野・視点（価格、数量、栽培方法、栽培環境、生産者年齢 etc）です。感覚的なものも含まれますので、バイヤーとの相性とも言えます。もう一つは、契約内容のフレキシビリティ（融通性）です。最初から要件が固まっていて、YESかNOの選択を迫る内容である場合は、容易に農家の代替が効く契約であるため、長期的な安定は望みがたく、逆に生産者の意見や条件を反映する余地のある場合は、内容をつめる過程においても信頼関係が築け、安定した契約が結べます。



収穫間近のハボタン

3. 今後の経営方針

契約栽培の中でも、より積極的に生産者から企画立案する生産者提案型の契約栽培に、現在力を入れています。緒に就いたばかりですが、小規模青果商とタイアップして、「青果商応援プロジェクト（以後 青果応援P）」に2年前から取り組んでいます。青果応援Pでは、まず小規模青果商の経営戦略を青果商と共に考え、差別化を図る上で必要な農産物を栽培・供給します。生産農家が商品企画から販売方法、時には小売店に掲示するポップの提案も行いま

す。タマネギを例にみますと、端境期に赤玉ねぎを栽培することによる、国産赤玉ねぎの周年確保や、通常加工用に回される特大（3L）の1個売り等を展開しています。企画によって成果は様々ですが、青果応援Pにおける玉ねぎ取扱量は、2年目で100トンを超えました。また、販売単価も上昇し、雇用の安定に寄与しています。今後も、生産者がイニシアティブをとる生産者提案型の契約栽培の拡充を目指します。



和歌山県農協青年組織協議会
会長（当時）を務める筆者

4. おわりに

「豊かさ＝選択肢の数」と私は考えます。それゆえ、選択肢を増やすことが、活動指針や経営方針の根底にあります。青果応援Pに取り組んだ背景にも、大手量販チェーン主導の流通再編による、流通チャンネルの減少、商品の画一化への危惧がありました。青果応援Pは、これに一石を投じる挑戦であり、僅かではありますが、店頭商品、流通チャンネル、出荷先、仕入先等、様々な選択肢を拡大できたことを嬉しく思います。

今後とも、担い手の育成や提案型契約栽培などに取り組むことで、農業が雇用創出産業として再評価されるとともに、農業が社会を豊かにする魅力ある産業となり、将来を担う子供たちにとって、「農家」がなりたい職業の選択肢の一つとなることを願っています。

私の農業

安定した所得を目指して

橋本市 地域農業士

木下善久



1. はじめに

私が就農したのは平成9年であり、柿が大暴落した年です。次の年は、台風の影響で価格は上がりましたが、平成11年からは安値安定となり、現在に至っています。

それまで、私は京都でサラリーマン（機械設計のエンジニア）を10年程しており、農業に関する知識は全くありませんでした。色々と事情があり、実家に帰って来て農業を継いだ訳です。

就農当時、父親から教えてもらった事は、「柿は標高が高いと気温が下がるのが早いので早く着色する。「刀根早生」は9月中旬に3割出せば良い。肥料は価格の安い化成肥料が良い」等でした。

しかし、我が家の全ての園地は標高400mの国城山麓にあり、標高が高すぎて開花期が平地よりかなり遅れ、実際には柿が早く着色することはなく、値段の高い時期に選果場に出荷するのは困難でした。

そこで、近所の農家の方々や4HCの先輩方に色々とお教えいただき助けをもらいながら、技術習得に努めました。

2. 農業経営の特徴

我が家の経営は、観光農園で人と違った事をしていきます。昭和50年に父親がリーダーとなり、近隣の農家14戸が集まり「国城観光農園組合」を発足

農業経営の概況

○作付品目と面積	
柿	180a
(刀根早生 65a、平核無 55a、富有 60a)	
温州みかん	40a
キウイフルーツ	10a
梨(幸水、豊水)	6a
栗	24a
○労働力	
家族	1人
臨時雇用	6人

しました。

当時、どの農家もみかんを作っており、みかん価格が暴落したのを契機に販売先の転換のため、組合を結成。父のリーダーシップには敬服しています。

しかし、「刀根早生」が世にでてからは、他の農家



観光農園の事務所

はみかんの木を抜いて、この「刀根早生」に改植したり、「富有」からこの品種に高接ぎ更新したので、組合員は徐々に減少し、30年前には我が家1軒のみになりました。

観光農園ですから、お客様が直接園地に来て、樹になっている富有柿やみかんを自分で収穫し、その場で食べます。また、持って帰ったり、人に贈ったりするので、美味しくなくてははいけません。

また、除草剤は、富有柿、キウイフルーツ、梨園には使っていません（みかん園には年1回のみ使用）。肥料は、化成肥料を一切使わず、配合肥料や堆肥、石灰を施用するようにしています。

そのおかげで、年にもよりますが、富有柿、みかん、キウイフルーツ、梨の6～8割は自分で売ることができています。



柿の剪定作業

3. 今後の経営方針

我が家の柿の宅配仕向けの「富有」とたねなし柿の比率は9対1位です。「刀根早生」で所得を上げるには、単価の高い9月中にどれだけ出荷できるかにかかっています。

出荷基準（カラーチャート3）ぎりぎりの少し青味の残る果実を収穫するので、この様な柿は宅配には回せません。また、脱渋が必要なので、選果場へ出荷する前にサイズ別に必要な個数を抜き取る必要

があり面倒です。このため、たねなし柿の注文は減らしたいと思っています。

さらに、柿の面積を刀根早生で15a、平核無で5aを減らし、梨、栗に改植しています。

選果場での取り扱いのない品目（品種）でも個人的に売ったり、余剰分は直売所等での販売が可能です。特に、栗は手間がかからず、栽培も容易なので面積を増やし、富有柿も人気があるので10～20aは増やしたいと考えています。

4. おわりに

柿価格が暴落してから20年が経ちます。柿で所得を上げるには「どんなに青い柿でも良いから9月中に出す」ことだと言いますが、本当にそうでしょうか。問題は9月末の「刀根早生」の出荷ピークをなくすことですが、他に方法はないのでしょうか。柿農家にしてもある程度の所得がなければ経営は持続不可能です。

私は、今後も観光農業を続けて、お客様に喜んでいただけるように栗や富有柿の面積を増やし、情報発信にも積極的に取り組み、経営安定に繋げていきたいと思っています。



果樹園から橋本市内を望む

私の農業

人との縁を大切にした みかんづくり ～ コミュニティーが支える大規模栽培 ～

湯浅町 指導農業士

森 一 洋



1. はじめに

私は、県立吉備高等学校（現 県立有田中央高校）を卒業後、昭和 48 年に就農しました。

就農当時は農地全体で 130a と現在の 3 分の 1 に満たない面積で、温州みかん（特に普通温州）を主体に甘夏、三宝柑、ビワ等を栽培していました。その後、徐々に温州みかんの栽培面積を拡大していき、当時は無かった極早生も植えました。田村地区は古くからの産地で老木が多く、毎年一部を改植して更新するため、ある程度の面積が必要になります。

これまで様々な品種の栽培に取り組み、ネーブル、いよかん等を栽培していた時期もありましたが、「土地に合ったもので、将来性のあるものを作っていこう」という考えのもと試行錯誤した結果、みかんに辿り着きました。

2. 農業経営の特徴

私のみかんづくりの特徴は、ノルウェー産海草の資材による土づくりと葉面散布で食味を高め、ナギナタガヤの草生栽培で雑草の発生を抑えつつ、土壌中の水分を適度に保つことです。

さらに、後期摘果やリン酸とカルシウム主体の葉面散布で品質向上を図ります。これにより、マルチなしでも高糖度となり、マルチ栽培にはない食味を出すことができます。以前は少肥栽培を行ったこともありましたが、今は安定的に生産するため、適量を施用しています。

農業経営の概況

○作付品目と面積	
温州みかん	460a
（うち幼木園 70a）	
極早生	40a
早生	220a
普通	200a
不知火	10a
レモン	10a
その他	10a
○労働力	
家族	2人
臨時雇用	随時

就農当時は共選に入っていました。解散に伴い、昭和 57 年に個選となりました。平成 8 年に倉庫「みかんの館」を建設し、フォークリフト等を入れました。さらに、スプリンクラーの導入で作業の軽労化を図ったことが、経営面積拡大のきっかけとなりました。



園地風景

した。また、この頃はインターネットのブームが始まり、私も見よう見まねでホームページ「Mild 工房 みかんの館」を開設し、平成9年よりみかんのネット販売を開始しました。ネット販売で使用しているみかん箱やチラシのデザイン、似顔絵は、ネットで知り合った友人が描いてくれたものです。



パソコンで情報交換

ネット販売を行っているとは消費者と直接やりとりするようになるため、市場出荷では気付かないことに気付かされることがあります。ネット販売では、最初の印象が良いと、多い方ではシーズン中に4回程度の注文があるため、4倍みかんが売れるという考えが成り立ちます。また、市場出荷する「田村みかん」の感覚では、みかんはほぼ年内に出荷するものという考えがありましたが、ネットでは3月頃までみかんが欲しいという問い合わせがあります。味選別のわけありみかんや小玉果の要望もあります。

私の農業経営は地域の皆さんに支えられています。スタッフは町内に住む漁師さんが中心で、漁や水産加工の合間に摘果や収穫に来てくれます。逆に、農閑期には私たちが皆さんを手伝いに行きます。町内に限らず、有田管内に住んでいる多くの皆さんの力に助けられており、日々感謝しています。

3. 今後の経営方針

現在は市場出荷が8割、ネット販売が2割で、一部を東京都(有楽町)の「わかやま紀州館」で販

売していますが、もっと一人ひとりのお客さんとの付き合いを大切にしたいため、市場出荷を主体にしながらもネット販売や直売所での販売を増やしていきたいと考えています。

栽培品目としては、ネット販売での需要が大きい早生みかんや高糖系の年明けみかんを増やしていくつもりです。栽培技術としては、早生みかんの熟期を遅らせたり、現在は不知火のみで試験的に取り組んでいる切り上げ剪定にも挑戦したいです。また、JAながみねで取り組まれている、「ふるしき(式)樹冠上部摘果」にも興味があります。

今後も労力分散を図りつつ、高品質なみかんを安定して消費者に届けていくことを目標に、試行錯誤していきます。



小玉果の需要が多い

4. おわりに

私は人との関わりを大切にしたいと思っています。そのため、農業士としての活動だけでなく、和歌山県果樹新品種同志会や、有田ネット21といった様々なグループに所属・活動しています。これらの活動の中で、多くの人と交流を深め、技術交換できるのは非常に有意義なことだと思います。

今後とも、指導農業士として若い農業者に一方通行の指導をするのではなく、情報交換の中で相互研鑽して、地域の農業振興に貢献していけたらと考えています。

私の農業

スターチス専作で

御坊市 指導農業士

鈴木 章 博



1. はじめに

私は昭和 55 年に大学を卒業し、実家の農業の跡取りとして就農しました。就農当時は、夏作にスイカ・メロン、冬作にエンドウ類・レタス・ブロッコリーといった野菜類の複合経営でしたが、次第にエンドウ類中心の経営にシフトしていきました。しかし、昭和 60 年代になると台湾や中国からの輸入の影響によりエンドウ類の価格が下落し、また長年の連作により収量も低下してきました。

こういった事がきっかけになり、昭和 61 年に御坊市名田地区にスターチス・カスミ草が、翌年にはスイトピーが導入されました。我が家でも昭和 62 年から花卉を導入し、次第にその比率を上げ、カスミ草とスターチスを柱にその他の花や露地の野菜を組み合わせながら栽培していました。しかし大きな戦力であった両親が高齢化し、更に介護が必要となったため平成 20 年頃からスターチス専作経営にシフトし、施設面積も減らして現在に至っています。



スターチスの栽培ハウス

農業経営の概況

○作付品目と面積	
スターチス	60a
○労働力	
家族	2人
臨時雇用 (11～5月)	2人

2. 農業経営の特徴

我が家の経営は、裏作無しのスターチス一本の栽培であり、全量を JA へ出荷しています。また、夫婦中心の経営で、栽培面積は 60a で地域では平均的な規模ですが、介護を抱えた夫婦としてはやや多めとも思われるので、コスト意識を持ち、省力化を図れるようなスターチス栽培を目指しています。

特徴の 1 点目は品種です。3 年前から和歌山県のオリジナル品種の比率を上げ現在では約 35a と栽培面積の半分以上を占めています。県オリジナル品種は自家育苗する必要はありますが種苗費の抑制にはつながっています。(収量等を合わせたトータルでプラスになるか否かは定かではありませんが、枯れや災害等で株が被害を受けた際のリスク回避にはなっていると思います。)

2 点目は天候によるリスク回避と労力の分散です。スターチス栽培では一般的に、10 月中旬頃にハウスにフィルムを被覆しますが、我が家では半分の約 30a は鉄骨ハウスや骨太のパイプハウスで周

年被覆としています。これにより、秋口の大雨や台風の影響の軽減と、ハウス被覆の労力の軽減を図っています。しかし、これも両刃の剣で、定植後の高温による生育不良が課題となり、当たり前ですが強い台風に見舞われた場合、逆に被害甚大となるリスクを背負っています。

3点目は耕種的防除に気を配るということです。スターチスの栽培で致命的な病害は、萎凋細菌病と灰色カビ病ですが、これらの病害ができるだけ発生しにくい環境を保つことを心がけています。具体的には、灰色カビ病に対しては薬剤散布と併行して、空気の滞留し易いハウスでは循環扇を使用しています。過去に頻繁に灰色カビ病を発生していた軒高の低いカマボコ型の単棟ハウスでは、雨天時ハウスを全閉にして循環扇を使うことで好結果が得られています。萎凋細菌病に対しては、これも薬剤と併行して、数年前からスターチス残渣のすき込み時に石灰窒素を施用するようにしており、以前より発病株が大幅に減少しています。



ハウスでの収穫作業

3. おわりに

スターチスの栽培を始めて約30年になりますが、毎年異なる気象条件や病害虫の発生などに振り回され、学習能力の無さも相まって、「普通のつくりをするのが、いかに難しいか」ということを痛感させられています。従来、私が思う地域農業の理想像と

は「地域や産地の中で普通のことを普通にやって成り立つ農業」であって欲しいということです。先進的な取り組みや付加価値を付けることは言うまでもなく必要ですが、地域に後継者が参入し、地域の農業を次世代へと繋げていくためには、何よりもこの地域で農業に就けば食べていけるという形が重要だと思います。産地としての農業が続いていくよう、地域の出荷組合やJAの部会の絆を大切に、微力ながら協力していければと考えています。

偉そうなことを書いてきましたが、我が家では、今のところ後継者の予定も無いので（27歳を頭に3人の息子はいるのですが・・・）、今後の経営をどうするか岐路に立っています。このままスターチスの栽培を続けていくか、思い切って他品目へ転換するか。今年還暦を迎える身としては、残りの人生の生き方、体力などを考慮して、今後の経営規模・経営品目・経営内容を決めていくつもりです。



スターチスの出荷調整作業



集荷場へ出荷

私の農業

農業も加工活動も楽しんでいます

田辺市 指導農業士

高垣 せり



1. はじめに

私は昭和 52 年に田辺市上秋津に嫁いで来ました。ここ、上秋津は一年を通して中晩柑、温州みかんの収穫が出来、地域おこしも熱心で素晴らしいところです。

田辺市龍神村という温州みかん、梅には無縁の共稼ぎの家で育った私には、何もかもが目新しく新鮮でした。私が就農したのは嫁いでから、子供 2 人の育児がひとだんらくして 5 年目です。

その頃は、水稻、梅、すもも、温州みかん、甘夏、八朔、ネーブル、ポンカン、三宝柑等たくさんの中晩柑を栽培していました。また、梅は全て白干しにしてから出荷でした。

就農時点で人件費のかかる農作物を減らし、ハウすみかん 2 棟 20a と、梅干し価格が良くなったので梅に力を入れました。その後、しばらくして重油高騰と共に、ハウすみかんを止め、マルチ栽培に切り替え糖度の高いみかん作りを始めました。

中晩柑においては、商品価値の高いデコポン、セトカに改植し、今に至っています。

2. 農業経営の特徴

現在の経営状況は、2 年前より息子が就農してくれたので、梅に関しては、白干し加工を止めて青梅出荷をしています。

高品質みかんを作りたいとの事で梅畑を温州みか

農業経営の概況

○作付品目と面積	
梅	120a
温州みかん (極早生 20a 早生 100a)	120a
中晩柑	30a
○労働力	
家族	3 人
臨時雇用	5 ~ 6 人

んに替えたり、極早生・早生と全てマルチ栽培にしています。農協のこだわりみかんグループに入り一から勉強しています。

販売面の取り組みとして、梅は青梅として農協出荷です。温州みかんの中晩柑は、農協と地元と他県の直売所、個人宅配で販売しています。温州みかん



マルチ栽培園

は、ダンボール詰めが忙しいですが自分で価格設定が出来るので収益も上がります。今では、紀南の梅の良さが知られ青梅も出荷しています。

また、16年前の平成12年地元で農産物直売所「きてら」が設立され、それをきっかけに生活研究グループの役をしたなかよしの5人で、何か加工をしようと地元の有志で振興局の指導を受けて秋津野からたち加工グループを作り、自宅に加工所を設けました。

最初は、消費が少なくなって来たダイダイでポン酢作りをしました。農家の女性ばかりのグループのため、昼は我が家の農作業、夜は加工所で商品作りです。おかげで時間を上手に使えるようになったと思います。また、加工所が情報交換の場となって良かったです。

「夏みかんマーメイド」や「だいたいぽん酢（手



秋津野からたちグループこだわりの加工品



柑橘と加工品のセット販売

しぼり)」、「梅ドレッシング」、「梅エキス」も作ることが出来ました。家庭菜園で出来た野菜についても乾燥野菜・金山寺味噌と色々な加工品が出来上がりお中元時期には柑橘と加工品のセット販売もできるように成り、うれしい限りです。



完全マルチ栽培みかん

3. 今後の経営方針

息子の就農で、経営に関しては大分変わって来ましたが、夫と私は出来るだけ今までの農業で培った技術・知恵を伝えていけたらと思っています。

今、一番労力を費やしているのが中晩柑の袋掛けなので何か良い方法がないか模索中です。

4. 終わりに

来年、指導農業士の定年を迎えます。これからは健康に気をつけ、農業士の時の経験、体験を活かしつつ、人とのつきあいを大事に楽しみながら、家庭菜園をしたり、山菜の加工に力を入れ、息子に嫌われない様に夫とともに農業のサポートをして行きたいです。

お知らせ

農林水産省の 「農業担い手メールマガジン」 に登録しませんか!

農林水産省から支援策等の最新情報が直接届きます。

○農業者向けの各種支援策

補助事業の公募情報や災害時の支援情報をはじめ、皆さんが活用できそうな支援等の情報を配信しています。

○経営改善につながるお役立ち情報

皆さんが活用できそうな最新の技術や機械の情報などを配信しています。

○農業関連イベント情報

農業担い手サミットなど皆さんが参加できる催しものを案内しています。

月1、2回程度
配信
登録無料!

登録方法はとても簡単です。



登録先 <http://www.maff.go.jp/j/pr/e-mag/reg.html>

PC・スマートフォンから登録・利用できます。

- ① 上記のリンク(登録先)から【新規配信登録】をクリックします。
- ② 登録画面上でメールアドレスを記入し、年齢・性別・都道府県・職業を選択の上、「農業担い手メールマガジン」にチェックを入れ、【確認】ボタンを押します。
- ③ 画面上に、記入・選択した内容が表示されます。確認の上、内容に誤りがなければ、【登録】ボタンを押してください。登録したメールアドレスに、メールが配信されますので、【登録URL】ボタンを押して、登録完了です。

※登録された情報は、メールマガジンの配信・アンケートの依頼又はコンテンツ制作の参考のためのみに利用し、それ以外の目的には利用しません。

PC・携帯電話から
登録・利用可

②の登録画面

新規配信登録 (SSL対応)

配信を希望する全てのメールマガジンをチェックしてください。

メールアドレス (必須)	<input type="text"/>
年齢	<input type="text" value="数字"/>
性別	<input type="radio"/> 男性 <input type="radio"/> 女性
都道府県	<input type="text" value="選択してください"/>
<input type="button" value="確認"/>	
<input type="button" value="【本省発行】"/>	
<input type="checkbox"/> 農林水産省メールマガジン - 毎週1回発行	
<input type="checkbox"/> 食料供給インフォメーション - 不定期発行	
<input type="checkbox"/> 農林水産物等輸出促進メールマガジン - 不定期発行	
<input type="checkbox"/> 食品安全エクスプレス - 毎日1回発行	
<input type="checkbox"/> 地理的表示メールマガジン - 毎月1回発行	
<input type="checkbox"/> 6次産業化・地産地消メールマガジン - 毎月1回発行	
<input type="checkbox"/> e-普及だより - 毎月1回発行	
<input type="checkbox"/> 米に関するメールマガジン - 毎月1回発行	
<input type="checkbox"/> 農業担い手メールマガジン - 毎月1回発行	

問合せ先 経営局経営政策課広報担当 TEL 03-3502-8111(内5134)

農林水産省

農業に懸ける想い

ブランドを守る大根作り

和歌山市 青年農業士

山崎 吉則



1. はじめに

私は県農業大学校を卒業後に就農し、11年目になります。小さい頃から畑を遊び場としており、大きくなってからも農業の手伝いをしていました。高校2年生の頃から将来は農業を継ごうと考え、農大へ進学しました。卒業時には農業関係の仕事に就いた後で就農しようとも考えましたが、両親が元気なうちに農作業に慣れる方が良いと考え、卒業後すぐに就農しました。

2. 農業への想い・取り組み

我が家は雇用を入れずに、両親と私の家族3人の自家労働力だけで農業経営をしています。私が就農することで労働力が増えることから借地により栽培面積を増やし、現在では延べ250aで栽培を行っています。施設がないので、作業分担をせずに、家族みんなで一緒に作業をします。

大根の収穫時期は朝3時からライトの明かりを頼りに作業を始め、7時までに洗いを終えます。その後、箱詰めし、お昼までには出荷作業を終えます。それから出荷箱作り等、翌日の準備をして一日の作業が完了します。通常は一日に200ケースを出荷し、多い日は300ケース以上の時もあります。出荷は個撰共販で全量JAわかやまに出荷しています。この大根は主に大阪、京都に出荷され高い評価を得ています。

当地域の大根は、表面のきめが細かく、肉質が柔らかく「布引大根」としてブランド化しています。より良い品種を追求することはもちろん、は種時期や収穫期を統一したり、選別を厳しくする等、過去からの努力の積み重ねでブランド化されています。

今後の、農業経営の方向は大根の高品質化です。肥料成分の配合を変えての肥料試験や品種試験を行っ

農業経営の概況

○作付品目と面積	
秋冬大根	120a
春大根	20a
ニンジン	100a
青ウリ	10a
○労働力	
家族	3人

て、消費者がより喜んでくれて「布引大根」のブランド価値が上がるよう努めたいと思います。また、経営面積の拡大を図り、自家の農業経営の安定化も進めたいと考えています。



布引大根の収穫



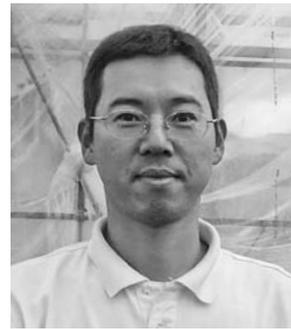
収穫しながら調整

農業に懸ける想い

イチゴとともに歩いていく ～ これまでも、そして、これからも～

紀の川市 青年農業士

奥 佳 樹



1. はじめに

私は大学卒業後に就農し14年目を迎えています。我が家では祖父の代からイチゴの栽培に取り組み始め、現在はハウスイチゴを主体に水稲との複合経営を行っています。

就農当時は30aで「さちのか」のみの栽培でしたが、平成21年に県育成品種「まりひめ」を導入しました。「まりひめ」は上品な香りと甘さが特徴で、果実の色や形が非常に美しく商品性に優れるため、少しずつ栽培面積を増やしてきました。

2. 農業への想い・取り組み

私の就農後、作業の効率化を図るための様々な改善をしてきました。まず単棟パイプハウスの連棟化と重油加温機の設置、一部の圃場への高設設備の導入、さらに平成20年に雨よけ底面給水育苗施設を新設しました。これにより作業効率の向上や作業姿勢が一部改善されました。なかでも、雨よけ底面給水育苗を導入したことで育苗期の炭そ病を激減させることができました。

生産面では減農薬や果実品質向上に留意しています。本圃定植以降は化学農薬低減のため、食品添加物由来・自然界由来の薬剤や天敵生物（カブリダニ類）の利用を数年来実践しています。また、高品質・大玉果生産のため各果房毎に摘果を実施し、さらに昨年からは試験的に炭酸ガス施肥機を導入し、光合成促進による果実品質の向上を目指しています。

まだまだ農業者として未熟な私ですが、今後も日々の農作業に励んでいきたいと思っています。

最後に、このような素晴らしい環境で農業をできて

農業経営の概況

○作付品目と面積		
水稲		120a
イチゴ		45a
(品種)	さちのか	20a
	まりひめ	25a
○労働力		
家族		3人
臨時雇用		2人

いることを諸先輩方に、そして家族に感謝したいと思います。



炭酸ガス施肥機を設置



天敵放飼中

農業に懸ける想い

柿を中心とした果樹間複合経営 ～ 四郷の串柿 伝統農業を守る ～

かつらぎ町 青年農業士

西山 幸佑



1. はじめに

私の兄が家を出たのを契機に実家の農業を継ぎたいとの想いが強くなり県農大に進学、農業の基礎技術を修得し、卒業と同時に就農。両親と一緒に農業を続けてきて早いもので18年になります。

経営内容は柿栽培が中心で、その内訳は極早生10a、「刀根早生」190a、「平核無」50a、串柿の原料に用いる「四ツ溝」100a、他に梅20a、李25a、水稻5a、その裏作としてのエンドウなどです。

就農当初、農作業を手伝ってもらえる人手（臨時雇用）や販売先が少なく現実には厳しい事を実感させられましたが、今では、串柿づくりの時期には5人の雇用労力で対応できています。

2. 農業への想い・取り組み

私の家は「串柿の里」四郷にあり、今はふもとの広口に住んでいますが、元々の家は、さらに山間部の下津川で、柿畑や水田はここに集中しています。

傾斜地が多く、農作業環境は良くありませんが、園内に軽トラが走れる園内道、小型運搬車の活用や薬液を通す配管敷設、低樹高化などで省力化を図っています。

さらに作業能率を高め、軽作業化を進めるため、紀の川市内で柿畑を借りて、極早生10a、「刀根早生」50a、「平核無」50aを栽培しています。

串柿作りの作業は、10月下旬から約1ヶ月間の皮むき、天日干し、その後、12月中旬の出荷に至るまでの棒押し作業、天日乾燥の繰り返しで毎日、忙しい日が続きます。

また、この時期は「平核無」の収穫作業と重なるため、この「平核無」の面積を、あんぼ柿加工仕向分を残して、残りは、極早生の「中谷早生」に高接ぎ更新しています。

販売先は、JA選果場への出荷と直売（やっちょ

農業経営の概況

○作付品目と面積	
柿	250a
(極早生10a、刀根早生190a、平核無50a)	
柿加工(串柿、あんぼ柿)生果	10t
梅	20a
李	25a
水稻(野菜)	5a
○労働力	
家族労力	3人
臨時雇用(串柿)	5人



梅の剪定作業

ん広場、めっけもん広場)です。

近年、イノシシなど鳥獣被害が増加しており、捕獲檻を設置していますが、園内道が壊されたり、道の補修に手間がかかります。

今後の目標として、補助事業の活用や優良農地を借りて規模拡大し、さらに農作業の省力化、軽作業化、効率化を図って行きたいです。そして、四郷地区伝統の串柿を継承しながら、たねなし柿生産と学生時代に専攻した野菜栽培にも挑戦し、収入の安定化を計っていきたいと考えています。

農業に懸ける想い

農業に真摯に取り組む

有田川町 青年農業士

林 宏 樹



1. はじめに

私は、大学を卒業してから就農し、今年で12年目を迎えます。就農以降、経営の柱である養鶏の仕事を覚えつつ、キウイフルーツの規模拡大や、温州みかんの改植、スモモの優良品種の導入等を行い、現在に至っています。

2. 農業への想い・取り組み

我が家の経営の主体は養鶏業です。養鶏業は日々の維持管理作業が重要だと感じています。特に夏場の高温期は暑さ対策のため、鶏舎の屋根にチューブで散水を行ったり、送風ファンで鶏舎内を涼しく保ち、卵の質を落とさないように心がけています。就農以降、卵の価格は大きく変わっていませんが、飼料価格は上昇しています。我が家では、市販の飼料に独自の配合を行うなど工夫しています。

また、私が就農後導入したスモモの「貴陽」はまだ県内での栽培はほとんどありませんが、高い果実品質と高単価が見込めます。しかし、受粉・結実率が悪く、人工授粉が必須となることや着色しにくいいため、マルチの敷設を行う等栽培する上での課題があり、作りこなす難しさを感じています。

今後は、労力的に考えても現状の規模を維持しつつ、経営内容の向上に努めていきたいです。そのためには、現在使用している鶏舎の更新を進めることと、「貴陽」の安定生産が重要だと考えています。また、「貴陽」について、ゆくゆくは自分で販売（直売）していきたいです。

私は、今後も養鶏をはじめ仕事は真面目に取り組み、その上で楽しみながら農業が出来ればと考えています。

農業経営の概況

○作付品目と面積	
養鶏（採卵鶏）	7,000羽
温州みかん	60a
極早生	10a
早生	40a
中生	10a
スモモ	20a
大石早生	10a
貴陽	10a
キウイフルーツ	15a
○労働力	
家族	3人



こだわりの鶏舎



スモモ「貴陽」

農業に懸ける想い

栽培と販売の効率化に向けて

みなべ町 青年農業士

栗山大介



1. はじめに

大学を卒業後、就農して17年がたちました。就農当初と作付け品目はかわらず、梅とハウスウスイを栽培しています。梅に関しては、350aあった栽培面積を250aに縮小しました。栽培面積は縮小しましたが、収穫量をこれまでより減らさないような梅栽培に取り組んでいます。

2. 農業への想い・取り組み

就農当初は、仕事の内容を覚えたり、栽培技術を身につけたりすることで、1年間の仕事をこなすことでいっぱいでした。数年前くらいから、20歳代の頃と同じだけの仕事をこなしていくと、体が故障するようになってきたので、両親とも話し合い、梅の栽培面積を縮小し、効率を上げるような経営体系に切り替えるようにしました。梅畑ごとに相性の良い交配樹の選抜や本数の見直し、高接ぎ、老木園の改植をおこない、縮小した面積でも収穫量を減らさないようにしていきました。また5年前くらいから、青梅の収穫体験や個人販売に取り組みはじめて、青梅の販売価格の底上げに力を入れることで、販売面での効率もあげるようにしてきました。



梅畑

ハウスウスイに関しては、現状維持のまま栽培を続けて失敗ないように情報をこまめに取り入れるように心がけています。

私が農業をするにあたって、自分の代で販売品目を1

農業経営の概況

○作付品目と面積	
梅	250a
ハウスウスイ	8a
○労働力	
家族	3人
臨時雇用	1人

つ増やすことを目標とし、現在、傾斜地でアボカドの栽培に取り組んでいます。無農薬で省力的に栽培でき、獣害が少ないことや温暖化という理由で選びました。植えた苗を枯らしてばかりで前に進んでいるのかも不明ですが、気長に挑戦して梅やハウスウスイのように販売できるところまでもっていけるように頑張ります。



ハウスウスイ



アボカドの果実

農業に懸ける想い

安定した農業経営のために

上富田町 地域農業士

山口 明 宏



1. はじめに

私は大学卒業後、すぐに就農して両親の梅栽培を手伝い始めました。今年で17年目です。ネット販売に力を入れて頑張ってきました。

2. 農業への想い・取り組み

父親は早くから農作業は少しでも効率よくしていった方がよいと考えていたらしく、園内道を整備し、私が就農した時には、全園地の約8割はスピードプレーヤーを使って農薬散布をしていました。若木の割合も多かったため収穫量も徐々に増え、就農後すぐに梅の漬け込み時も鉄コンや1時間にコンテナ150杯程度選別できる選果機を導入しました。



コンテナ 150 杯程度選別できる選果機

(1) 農業経営簿記の取り組み

私が就農してからすぐ始めたことは2つありました。1つはソリマチという農業経営簿記ソフトを

農業経営の概況

○作付品目と面積	
梅	450 a
○労働力	
家族	3人
臨時雇用（農繁期）	15人程度



農業簿記利用優良経営体表彰受賞

使った経営管理と、もう一つは、インターネットによる梅の販売です。簿記の知識が多少あったので、一年目から複式簿記に移行し、その後今日まで毎年決算書を作成しています。自分で記帳することにより、売上や経費の増減が分かり、経営状態が正確に把握できるのでよかったと思っています。

(2) インターネット販売

もうひとつのインターネット販売は、取りかかった2000年頃に、比較的安易にHPを作成できるソフトが出来たこともあり、ちょうどよいタイミングだったと思います。ただ当初は、日中、梅栽培をしながらのHP作成でしたので、毎夜仕事が終わってから3時間ぐらいはパソコンの前に座ってコンテンツを作成していた記憶があります。

2000年～2002年頃はまだネット販売の黎明期で、農産物をネット販売している個人は比較的少なかったと思います。そんな中、十数名程度で全国でネット販売をしている農家のグループがあるのを知り、そのグループに入会させてもらいました。そこでは、HP作成に必要な写真撮影の技術や、マーケティング等の勉強会をすることにより何とか独学で販売を軌道に乗せることが出来ました。ネット販売の売上高については、2000年から現在まで前年割れしたことはなく、ある程度売上高が確保できるようになった近年でも最低前年比5%以上の伸びをしている状況です。

(3) 今後の経営

今後の展望は、まず現状維持の栽培面積は4.5ha～5.0haをキープし、改植や補植をきめ細かくし、なるべく収穫量を落とさないようにしていきたいと思っています。



梅の改植や補植園

ネット販売については、受注方法や顧客管理方法にまだまだ改良の余地があるのでそれを少しずつでも効率よくしていきたいと思います。ネットコンテンツについてもまだいろいろとアイデアがあるので農作業の合間になりますが、少しずつアップしていきたいと思います。

現在は生産から加工、受注管理まで私が中心になって仕事回している状況です。もちろん農繁期や選別、剪定などには、パートさんに来て頂いていますが、家族以外の常雇人さんはいませんが、ただ現在の売上、経費の割合は非常に良い状態にあると考えているので、今後も「大規模な事業展開はせず」少しずつ売上を増やすように改良していきたいと思っています。

県農業大学校学生です。

～農業大学校1年生の自己紹介&近況報告(第2回)～

私の出身は田辺市で、熊野高校に進学しました。そこで農業クラブに入部し、農業を初めて体験しました。花卉では、何百、何千という苗を鉢上げしたり、果樹では、一日中みかんの収穫をしたりしました。大変だったのですが、やり終わった時の達成感が格別で、もっと農業について知りたくなり、ここ農業大学校に進学しました。まだ知らないことばかりの毎日ですが、授業や実習を積み重ねることにより、最近では少しずつ理解できるようになり、農業がもっと楽しくなってきました。この大学校で積み重ねた知識、経験を卒業後も活用していけるよう、日々努力していきたいと思っています。



小杉里緒



菅谷祐介

私は県立紀北農芸高校出身で、高校の頃は部活の卓球で汗を流す毎日でした。ここ和歌山県農業大学校に進学した理由は、農芸高校在籍時に専攻していた野菜について、更に詳しく学びたいと思ったからです。入学した当時は知らないことだらけで不安でしたが、最近は大いぶ分かってきたように思っています。このまま2年間しっかり勉強や実習に励み、色々な知識や経験を積んでいきたいと思っています。また、あと2年間しか学生生活がないとも言えるので、一日一日を大切に、仲間と切磋琢磨し、楽しいスクールライフを送りたいと思っています。

私の家は非農家で、私自身もほとんど農業に関心はありませんでした。しかし、進学した紀北農芸高校で農業の面白さを知り、担任の先生からの勧めもあり、ここ和歌山県農業大学校に入学しました。高校の時は農業機械について学ぶコースであったため、農作業や農作物等については知らないことが多く、入学当時は講義や実習が大変でしたが、新鮮な気持ちで臨むことができました。今は、毎日楽しく、勉強に励んでいます。

私は人とコミュニケーションをとるのが、どちらかと言うと苦手ですが、運がいいことにこの学校でも仲間に恵まれました。進路はまだ決まっていないので、自分で考えると同時に仲間たちの進路も参考にし、しっかり自分の将来を見据えていきたいです。



谷口統哉

私の出身は龍神村で、山に囲まれており、自然豊かなところです。そして、温泉が有名なところでもあります。

私がこの和歌山県農業大学校に入学したきっかけは、高校の進路指導の先生の「農大に行ってみる気はないか」という一言です。当時私は、進学することを反対されていて、なんとなく就職する気でいました。ただ、就職先として漠然と考えていた会社や企業のほとんどが農業関係でした。そんな私に、進路指導の立花先生は農業大学校の存在を教えて下さり、オープンキャンパスなどに1度も行ったことがなかったにも関わらず、受験することを後押ししてくださいました。

入学し、興味があった農業についての授業や実習を受けるようになった今、私の夢は農協の営農指導員になることです。この夢を実現するため、日々努力し、頑張っていこうと思っています。



玉置 あぐり

.....



八百 悠 輝

私は県立紀北農芸高等学校出身で、部活動は和太鼓をしていました。太鼓の音には感情が入るため、お客さんに「よかったよ」と言われるとうれしく響き、結果として和太鼓部を3年間続けることができました。現在通っている和歌山県農業大学校の裏手に、上記の出身高校があるため、今でも度々OBとして練習に参加しています。

私が農業大学校に進学した理由は、その農芸高校で農業の基礎について少し学び、もっと詳しく知りたいと思ったからです。農大では果樹コースを専攻し、様々なことを勉強しています。進学し、知らないことが多く大変だったのですが、最近は少し慣れてきました。ここで培った経験や知識を将来に役立てようと思っています。

.....

私の出身地は和歌山市吉礼です。

私が農業に興味を持ったきっかけは、私自身が野菜嫌いで、それを克服するために祖父と一緒に家庭菜園で野菜作りを行ったことです。それから、野菜作り（農業）に興味を持ち、ここ和歌山県農業大学校に進学しました。農大に入学後、草刈り、水やり、収穫、調査など大変なことだらけでしたが、自分が栽培した野菜には愛着を感じるようになりました。今では一番苦手だったトマトも美味しく食べられるようになり、私のような野菜嫌いな人でも食べることができる野菜を作るのが将来の目標になりました。

私は寮生で、友人たちと毎日仲良くワイワイと楽しい学校生活を送っています。この恵まれた環境の中で、友人たちと資格試験などの勉強も頑張りたいと思っています。



山本 優

試験研究レポート

REPORT

和歌山県果樹試験場におけるカンキツ育種の取り組み

和歌山県果樹試験場 栽培部 副主査研究員 田嶋 皓

1. はじめに

和歌山県果樹試験場では、普及性の高いカンキツ新品種の育成を目指しており、これまでに「ゆら早生」より樹勢が強く早熟な極早生温州ミカン「YN26」を育成選抜し、平成24年に品種登録しました。さらに現地の枝変わり個体から、浮皮が少ない中生温州ミカン「きゅうき」を選抜し、品種登録の支援をしてきました。ここでは、当場における新品種育成の取り組みについて、様々な育種手法とあわせて紹介します。

2. 和歌山県果樹試験場におけるカンキツ育種の取り組み

1) 温州ミカンについて

花粉が少なく種子がほぼできない温州ミカンは、異なる品種間で交配することができないため、枝変わりの探索や珠心胚育種（後述）による品種育成が行われてきました。

① 枝変わり探索

枝変わりとは、枝もしくは樹単位で起こる突然変異の一種であり、全国的に普及している温州ミカン品種の多くは枝変わりから生まれています。和歌山県でも、「ゆら早生」、「田口早生」、「きゅうき」が枝変わりから選抜され、普及に至っています。

果樹試験場では、平成16年から生産者の方々に優良な枝変わりがないか呼びかけを始めており、これまでに累計120個体の果実調査を実施しました（図1）。ミカン栽培においては、味がよいだけでなく、栽培性（作りやすさ）を考慮する必要があり、枝変わりの中には優れた栽培性をもつ個体がまれに見つかります。現在浮皮が少なく貯蔵性がよい晩生ミカンの最終選抜を行っています。今後、発見された生産者が出願手続きをされることとなりますが、スムーズに品種登録がなされた場合、早くて3年後には苗木が販売される見込みです。

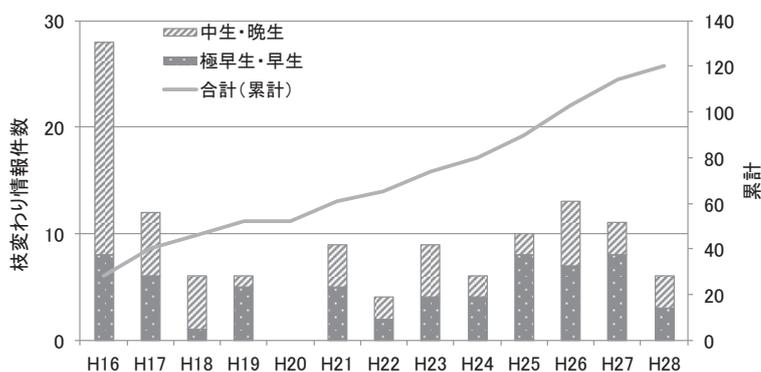


図1 温州ミカン枝変わり情報件数（平成16～28年度）

② 珠心胚実生による新品種育成

種子の中に複数の無性胚（花粉親の遺伝子を引き継がない）をもつ性質を多胚性といい、その無性胚から発芽した実生を珠心胚実生（母親のクローンにあたる）といいます。温州ミカンは多胚性であり、珠心胚実生の中には母親の形質を引き継ぎつつ、熟期が早く樹勢が強い等の特性をもつ変異個体が現れることがあります。果樹試験場ではこれまで「ゆら早生」の珠心胚実生から「YN26」を育成しており、現在は様々な品種の珠心胚実生個体を育成し、選抜調査をしています。

2) 雑柑について

雑柑類には単胚性品種（種子の中に胚が一つしかない）が多く、花粉も得やすいため、人工授粉によって異品種間の種子を獲得し、交雑個体を育てて選抜する交雑育種が主流です。

①優れた食味をもつ新品種の育成

果樹試験場ではこれまでに 1000 以上の交雑個体をほ場で育成しており、少ない面積で多くの個体を調査するために密植で結実管理を行っています（長梢管理:写真 1）。これらの中から i) 食味がよい、ii) 端境期に出荷可能、iii) 栽培が容易、などの優れた特性をもち、普及性が高い有望個体の選抜を目指しています。現在、1月下旬～2月に成熟する有望個体の最終選抜を行っており、今後、スムーズに品種登録手続きがなされた場合、早くて3年後には苗木が販売される見込みです（写真 2）。

②機能性成分をもつ香酸カンキツ育成

農産物が元来もつ機能性成分に近年注目が集まっています。平成 27 年には、温州ミカンに含まれる β -クリプトキサンチンが骨粗しょう症の予防に効果があることから、生鮮食品として初めて静岡県の三ヶ日ミカンが機能性表示食品に認められました。カンキツには他にも多くの機能性成分が含まれ、本県特産の香酸カンキツ「ジャバラ」には、フラボノイドの一種であり抗酸化作用や抗アレルギー作用をもつナリルチンが多く含まれることが知られています。果樹試験場では、この「ジャバラ」を親に使い、多様な機能性成分を含有する新たな香酸カンキツの育成に取り組んでいます。



写真 1 長梢管理（約 600 本 / 10a）



写真 2 選抜した有望交雑個体：
（清見×中野3号ポンカン、1月下旬～2月成熟）

3. 農研機構果樹茶業研究部門（以下農研機構）による育成系統の適応性検定試験の実施

農研機構では、全国に普及するカンキツの新品種育成に取り組んでおり、そこで育成された選抜系統については、和歌山県をはじめとするカンキツ主産県において果実品質や栽培性から普及性を判断し、評価を行う系統適応性検定試験を実施しています。

これまでに「せとか」や「はるみ」など全国的に広く普及する品種が生まれており、果樹試験場でも新品種について研修会や発行物により随時情報提供を行っています。近年は、「津之望（つなのぞみ）」や「みはや」のように年内に出荷可能な早生カンキツの登録が増えており、この2品種は年内出荷可能で温州ミカンと差別化できる商材として産地化が期待されるため、継続的な調査を行っています。

4. まとめ

生産者の高齢化や後継者不足など、カンキツ生産を取り巻く情勢は厳しさを増しています。近年世に出ている品種の中には、味は良いものの病気に弱い、収量が少ない、などの理由で経済栽培が困難な品種が少なくありません。今後果樹試験場では、栽培のしやすさなども重視しながら、新品種の育成に努めていきたいと考えています。

試験研究レポート

REPORT

梅調味廃液を活用した養鶏環境改善と 鶏ふん堆肥製造技術の開発

和歌山県畜産試験場養鶏研究所 主査研究員 鳩谷 珠希

1. はじめに

和歌山県は言わずと知れた日本一のウメの産地ですが、梅干しの調味過程で発生する「梅調味廃液」の処理が問題となっています。梅調味廃液はクエン酸などの有用成分を含みますが、塩分や糖分を多く含むことから再利用が進んでおらず、大部分が産業廃棄物として処理され、その有効活用が強く求められています。

その一方で、県内のブロイラー農場では、鶏ふんから発生するアンモニアを多量に含む臭気により、鶏ふん堆肥製造時の作業環境や周辺環境への影響が問題となっています。梅調味廃液はクエン酸等の有機酸を多く含み、酸性であることから、アンモニアの揮散を抑制し、空気中のアンモニアを低減させる効果があるのでは、との観点から、県内の試験場が協力して試験に取り組みました。

2. これまでの取り組み

県畜産試験場や農業試験場による試験の結果、梅調味廃液を堆肥原料（鶏ふんとオガ粉の混合物）に5%添加すると、鶏ふん堆肥化時のアンモニア揮散量が低減することがわかりました。そこで、県内のブロイラー農場で、鶏出荷後の敷料に、鶏ふんを含む敷料重量の5%の梅調味廃液を噴霧したところ、噴霧しない鶏舎に比べて噴霧した鶏舎では、5日間の平均アンモニア濃度が約3割程度となりました。このことから、梅調味廃液を活用することで、鶏ふん除去作業時に発生するアンモニアによる作業員などへの影響が軽減されることが示唆されました。

3. 試験研究の内容・結果等

(1) 梅調味廃液を噴霧した鶏ふん堆肥製造試験

梅調味廃液を噴霧した鶏ふんで堆肥が製造できるか、実際の農場で実証試験を行いました。

農場は本県の代表的ブランド鶏「うめどり」を飼養しており、「うめどり」は梅干しの製造工程で発生する



写真1 梅調味廃液



写真2 噴霧

「梅酢」を脱塩・濃縮したものを飼料に混ぜて育てたブロイラーです。

このうめどり1万羽を飼養した後の敷料（推定重量約43.9トン）に、5%の重量となるよう、梅調味廃液を約2.2トン噴霧しました。梅調味廃液は、農場作業員が1m³タンク2個分の梅調味廃液を県内の1農協の梅加工場から運搬し（写真1）、鶏出荷後そのままの状態の鶏舎内で、動力噴霧器を用いて、敷料表面にまんべんなく噴霧しました（写真2）。

作業自体は難しいものではなく、約2.2トンの梅調味廃液を噴霧するのに30分程度の短時間で終了しました。この際、産業廃棄物である梅調味廃液が鶏舎外部に漏出しないよう、カーテンや扉を24時間閉め切った状態にしておきました。

梅調味廃液を噴霧した敷料を堆肥化施設に搬入後、単位容積重量が500～600kg/m³になるよう水分を調整した後、自走式繰り返し装置付き堆肥舎で1日1回の攪拌による堆肥化処理を23日間行いました（写真3）。その後、十分に堆肥化を行うため、62日間以上堆積し、堆肥化終了としました（写真4）。

堆肥化過程の温度測定では、繰り返し後60℃を超える日が2日以上あることを確認し、梅調味廃液噴霧により堆肥の発酵が抑制されていないことを確認しました。



写真3 自走式堆肥舎



写真4 堆積による堆肥化

堆積62日後の堆肥成分は窒素3.7%、リン酸3.5%、カリ3.2%、C/N比10.6（いずれも乾物あたり）となり、一般のブロイラー鶏ふん堆肥と同様でした。また、ウメへの施用については、年間窒素施用量の50%程度を上限として、本堆肥を利用できることが、うめ研究所により明らかにされました（研究結果は、本誌5号（平成27年11月発行）をご覧ください）。

（2）梅調味廃液利用ガイドラインの作成

梅調味廃液は産業廃棄物であることから、収集運搬や処分を業として行う場合には産業廃棄物収集運搬業や処理業の許可が必要です。そこで、梅調味廃液を利用しやすくするため、県循環型社会推進課と協議を行い、ガイドラインを作成しました。本ガイドラインに従って利用する場合、産業廃棄物収集運搬業の許可等を取得することなく、一般の養鶏場で梅調味廃液を臭気対策に利用できるようになりました。

4. おわりに

梅調味廃液を添加した鶏ふん堆肥は商品名「ふっかふか」として、平成26年4月より県内の1農協より販売されています。また、農業試験場により、本堆肥をハクサイ等へも利用できることが明らかとなっています。今回の取り組みにより、「梅酢添加飼料で育てたうめどりの鶏ふんに、梅調味廃液を添加して製造した堆肥を耕種農家等で施用する」という、ウメを中心とする資源を地域内で循環させるモデルができました今後も様々な観点から本県の発展につながる研究を重ねていきたいと思えます。

試験研究レポート

REPORT

イタドリ・コゴミの栽培について ～省力栽培可能な魅力の山菜～

和歌山県林業試験場 特用林産部 主査研究員 杉本小夜

1. はじめに

山菜は季節を感じさせる食材であるとともに、山村地域の貴重な収入源の一つでもあります。

林業試験場では、山村地域の遊休地の活用や新たな収入源を確保のため、省力栽培可能な山菜について研究に取り組んでいます。今回は、その中でも近年人気のあるイタドリとコゴミについて栽培方法と試験場での取り組みをご紹介します。

2. イタドリについて

タデ科の多年草で、郷土山菜として親しまれており、煮物や炒め物に用いられます。至る所で見られるイタドリですが、近年、獣害や環境の変化等により、太く利用価値の高いものは採れにくくなってきており、栽培に取り組もうという方々が増えてきています（写真1）。



写真1 イタドリ栽培地(定植2年目)

(1) 栽培方法

栽培歴		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
露地栽培	1年目	耕耘・畝立・元肥	マルチ・定植(ポット苗)			除草				耕耘・畝立・元肥	マルチ・定植(地下茎直植え)		
	2年目以降	収穫		追肥						ガラ刈り		マルチ剥がし・追肥	
										ガラ刈り			追肥

イタドリの苗は地下茎をカットして作ります。カットした地下茎をポット苗に仕立てるか、または直接畑へ植えつけます。

あまり土地を選ばず栽培可能ですが、日当たりと水はけが良い場所を好むので、水田跡地を活用する場合は畝立てが必要です。マルチを行うと除草作業の軽減、収量の増加、早期収穫の効果があります。また、元肥、追肥を行うことで収量が大きく伸びます。

管理については、追肥と冬に枯れた茎を刈り取る他は特に必要ありません。植栽2年目には収穫可能となり、700～800kg/10aの収穫が見込めます。

(2) 優良系統の選抜

試験場では、栽培・加工に向く優良系統株の選抜を行うため、平成26年に県内9地域から選んだ候補株から挿し木苗を作り、平成

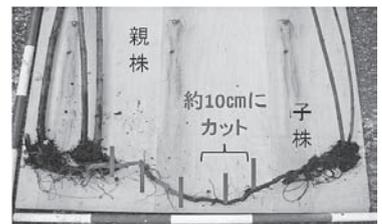


写真2 イタドリの地下茎

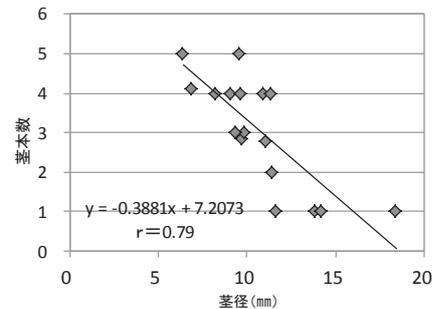


図1 イタドリ優良系統候補株における茎根元径と茎発生本数の関係

27年から場内において同じ条件下で育成しています。その結果、茎の本数、太さ、茎の伸び方には個体差があり、全体的には、茎発生本数が多いと茎が細く、少ないと太くなる傾向があることがわかりました。今後、候補株を増やすとともに、収量や皮の剥きやすさを調査し、優良系統株の選抜を行っていきます。

3. コゴミについて

夏緑生のシダ植物で、アクがなく、そのまま料理して食べられることから人気の高い山菜です。近年は県内の栽培者も増え、春には産品販売所でよく見かける山菜となっています。



写真3 コゴミ栽培地（定植5年目）

(1) 栽培方法

栽培歴		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
露地栽培	1年目							耕耘・畝立・元肥	定植(秋植え)		耕耘・畝立・元肥	定植(春植え)	
	2年目			追肥			除草						追肥
	3年目以降	収穫		追肥			除草				間引き		追肥

コゴミの苗も地下茎をカットして作ります。カットした地下茎をポット苗に仕立てて畑へ植えつけます。(財)バイオセンター中津で苗を購入することもできます。コゴミは冷涼で湿潤な場所を好み、乾燥地を嫌うので半日陰地が栽培に適していますが、日向でも乾燥しない場所であれば栽培が可能です(写真3)。

定植後、2～3年で収穫可能になります。成株を2番芽まで収穫した場合、200kg/10a以上の収穫が見込めます。施肥をしなくてもある程度育ちますが、追肥を行うと収量が伸びます。

(2) コゴミの翼葉を少なくする方法

コゴミの品質は、流通のほとんどを占めている東北産(ハウス促成栽培)が標準となっているため、ビラビラとした翼葉の多い本県産は、翼葉の除去が求められることがあります。手間がかかるうえ、傷みの原因にもなります。そこで試験場では、翼葉を少なくする栽培方法を検討しました。その結果、若芽の発生直前に寒冷紗等で99%以上遮光を行うことにより、翼葉を少なくできること、またそれ以下の遮光率では効果が少ないことがわかりました(図2)。

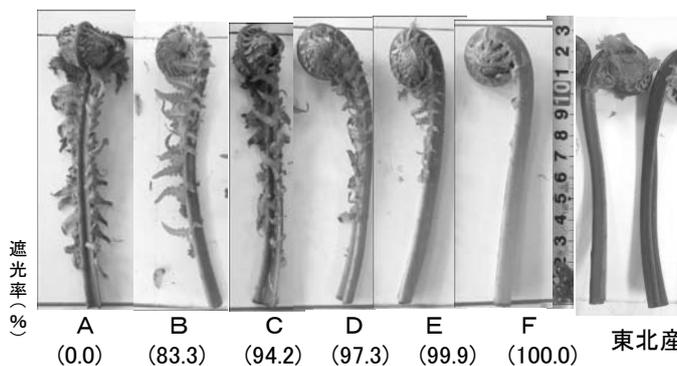


図2 遮光率・被覆方法の違いによるコゴミ翼葉の形状

4. まとめ

イタドリ、コゴミは、作付け後はほとんど手間がかからず、とても栽培しやすい作物です。遊休地や耕作放棄地の活用につながることも副収入源としても魅力的ですので、ご興味を持たれた方は、ぜひ栽培にチャレンジしてみてください。

両作物に関しては既に栽培指針やマニュアルを作成しています。詳細については当試験場特用林産部までお気軽にお問い合わせ下さい。

農業士会支部活動レポート

REPORT

平成 28 年度和歌地方農業士会活動ダイジェスト

和歌地方農業士会事務局

1. 総会及び講演研修会を開催

和歌地方農業士会は、4月8日に紀三井寺ガーデンホテル はやしにおいて平成28年度総会及び、研修会を開催しました。

総会は会員50名の出席のもと、平成27年度活動経過及び28年度活動計画とそれに伴う決算、予算が議案書のとおり承認されました。

総会終了後には、「県内農産物の生産及び輸出の現状について」と題し、和歌山社会経済研究所 研究部長 藤本幸久氏の講演を行いました。講師の藤本氏からは、研究所の活動内容や農業政策の流れ、果樹の輸出状況についての講演があり、その後、農業環境・鳥獣害対策室 鈴木隆浩氏から「農薬の安全使用について」と題して、農薬の有用性、事故防止対策、住宅地の近くでの農薬使用時の注意点について研修を受けました。



平成28年度総会



藤本氏の講演

2. 女性部会が「伊賀の里 モクモク手づくりファーム」で視察研修

女性部会10名が11月4日に三重県伊賀市の「農業生産法人 伊賀の里 モクモク手づくりファーム」で6次産業化についての研修を行いました。

始めに担当者から説明を受けました。付加価値をつけて自分で価格を決めた農産物を売りたいと、養豚農家の出資で始めた昭和63年設立当時には、ハム等の加工品がなかなか売れなかったとのことでした。売り上げが上がり始めたきっかけは「農業をもっと知ってもらいたい。触れあってもらいたい。」との思いを伝えたいと始めた体験教室とのこと、今では年間売上げ約50億円になって、来場者も増え現在は年間50万人もあるとの説明でした。

ファーム内レストランでの昼食では、モクモク手づくりファーム自社加工のハム、ソーセージの種類も多く、提供されるメニューも豊富で大変美味しく頂きました。また、食事後に手作り体験教室、パン工房、農産物直売所等の施設見学も行いました。

帰りには奈良市針町の「道の駅 針テラス」の農産物直売所も立ち寄り、加工品や農産物の品質、袋詰め
の状況などを見学しました。



研修室で説明を受ける



ファーム内見学

3. 海南市農業士会が鳥獣撃退器の研修会

2月1日に海南市農業士会が京都府で鳥獣撃退器「UP169」の研修を行いました。

この撃退器は京都府森林技術センターの小林主任研究員と台湾のメーカーが開発したものです。始めに小林研究員から、日本での鳥獣対策の歴史、撃退器の開発に至った経緯の説明を受けた後に、撃退器の使用方の講習を受けました。撃退器は本体の赤外線センサーで前後15mまで鳥獣の接近を感知し、高周波音と発光ダイオードの光で鳥獣を撃退するものでした。電源はソーラーパネルで充電に充電ができ、撃退器で発生させる周波数を変えることによりシカ、イノシシだけではなくカラスまで忌避できるとのことでした。



開発者から説明を受ける

設置が比較的簡単にできることから、参加者から試験的に導入したいとの意見が出ました。

農業士会支部活動レポート

REPORT

那賀地方農業士会の活動について

那賀地方農業士協議会事務局

1. 那賀地方農業士協議会県外研修の開催(那賀地方農業士協議会長 指導農業士 青柳市郎)

①はじめに

那賀地方農業士協議会は、年に一度、農業士間の交流を深めるため県外研修会を実施しています。今年は、こと京都株式会社、錦市場を見学しました。

②農業生産法人こと京都株式会社視察研修

今年は2月23日に農業生産法人こと京都(株)を視察しました。こと京都は、伝統野菜の九条ネギの周年栽培に取り組んでいる会社で、建物の中に入るとネギの臭いが充満し長く入っていたら目が痛くなるほどの状態です。説明をいただいた宮川営業部長の話では、九条ネギで会社が成り立っているのも臭いも全く気にならない、むしろ良い臭いを感じるということでした。こと京都を設立して15年になるがカットネギだけの頃は販売には苦労したようでした。創業者で当時は一農家の山田氏が平成12年にカットネギを持って東京のラーメン店に飛び込みで営業に行いました。当時の関東では白ネギが主流でしたが、営業努力と京都の伝統野菜及びこと京都のネーミングが受け入れられ順調にラーメン店への直販が広がりました。更に、販路を拡大するためカットネギだけでなく商品開発を進めると共に販路を一流の販売店をターゲットにしました。今では、カットネギを主流として粉末ネギ・乾燥ネギ・チップネギ・ペーストネギなどがあり経営は順調です。また、平成21年には24軒の農家と契約栽培を結びネギの生産量を拡大しました。ネギは軟弱野菜であるため風が吹けば倒れるし雨が続けば病気にもなりやすい、連作障害も出る、霜が降れば味が良くなるが傷みが出やすいなど苦労が絶えないようでした。柿やみかんを作っている私にもその苦労がよく分かります。

また、こと京都が、今、力を入れている加工は安全・安心を提供するため設備にお金をかけているそうです。創業者の山田氏が農業を始めたときの所得は400万円であったが、現在では従業員106名、資本金2100万円、年商10億円の会社に成長したとのことでした。

③錦市場見学

こと京都を視察した後、大勢の買い物客で賑わう錦市場に寄りました。いろんな店がある中で果実専門店



宮川氏から説明を受ける



ネギの加工商品

を見つけました。数々の果物がある中でみかん M 級を一個 200 円で売っていました。本県が一番のみかん篤農家的場さんのみかん（的兵みかん）として並べられていました。一袋で 580 円の値段しか付かないみかん生産者にとっては夢の値段です。この視察研修に参加したことで、物作りの大切さを大いに学びました。来年も是非参加したいです

2. 紀の川市農業士会総代会・研修会の開催（紀の川市農業士会長 地域農業士 佐本佳隆）

①はじめに

平成 28 年 3 月 29 日に紀の川市役所本庁舎 大会議室において、総代会及び研修会を開催しました。

総代会では、会員、関係者合わせて 44 名の出席のもと、平成 27 年度活動経過並びに収支決算報告、続いて、平成 28 年度活動計画（案）並びに収支予算（案）が、それぞれ議案書のとおり承認されました。

②研修会の開催

総代会終了後には研修会として、前半は会員 2 名による体験発表を行い、後半は講師に 3 名の方をお招きして講話を行っていただきました。

前半の体験発表については『私の農業』をテーマに、「ほんまもんを目指して、ほんまにうまい農産物を届ける ～有機農業を始めて 28 年～」と題して、指導農業士 北田多賀男氏より、有機農業を始めるきっかけから今日までの体験を熱く語っていただき、「安心安全で美味しいお米作り ～イオン水の利用～」と題して、私こと地域農業士 佐本佳隆が、日頃の農業経営への取り組みなどの体験発表を行いました。

後半の講話については、まず、那賀振興局 農業水産振興課 宮向克則氏より「モモの果肉障害の対策技術について」、現地実証概要と結果、対策技術の問題点と課題、今後の取り組みを、次に、紀の川市役所 農業林業振興課 畑中淳志氏より「鳥獣被害の現状と対策及び支援について」、防護柵・電気柵設置のポイントや鳥獣被害防止対策の基本的な考え方、補助事業の概要など、最後に、和歌山県農業会議 農業者年金総合指導員 向井元治氏より「農業者年金について」、農業者年金の必要性や特徴、メリットなど、それぞれに 30 分程度の講話を行っていただきました。



体験発表：安心安全で美味しい米作り
地域農業士 佐本 佳隆



講話：モモの果肉障害対策技術



体験発表：ほんまもんを目指して

農業士会支部活動レポート

REPORT

伊都地方農業士連絡協議会の活動について

伊都地方農業士連絡協議会事務局

1. 総会及び研修会の開催

4月12日、伊都地方農業士連絡協議会（玉置 成朝 会長）の総会を開催し、平成27年度活動経過、収支決算報告、平成28年度活動計画及び収支予算案等、全ての議案が承認されました。

総会後の研修会では、「柿の品種開発動向及びGA処理による極早生柿の生理落果の抑制」と題して、かき・もも研究所の担当者から講演を聞きました。講演の中で、果樹研究所や福岡県・岐阜県などで育成された甘柿新品种の品種特性や極早生柿の生理落果防止にジベレリン処理の効果的な散布方法、留意点等について説明があり、出席した会員らは熱心に耳を傾けていました。



熊本主査研究員の講演を聴く

2. 女性部会研修会の開催

8月18日、本協議会女性部会（森脇 佐太代 会長）では、優良経営農家の経営事例の研修を通して、会員の親睦と女性ならではの発想で地域農業の振興に役立てようと小川教雄氏（紀の川市平野）宅を訪問し、農場等を見学。会員9名が参加しました。

小川氏の経営内容は、切り花ハボタン120a、タマネギ350a、施設野菜（トマト、キュウリ）38a、カキ60a等、花き・野菜・果樹作の複合経営体。平成26年度に緑白授有功賞（農事功績表彰）に輝いた優良経営農家であり、新規就農者育成にも尽力されています。

小川氏は、講話の中で農業は安く、沢山作ること、楽をして楽しく作業すること、一年一事業で新規事業を起こすことの重要性について説明し、開発中のあんぼ柿の試食もさせていただきました。

参加者の中には、ハボタンやタマネギの栽培面積の大きさに驚く一方で、現在、小川氏が試作中のホオズキについて熱心に質問していました。



小川教雄氏の施設を見学

3. 京都方面への先進事例調査

平成29年1月24日、新規就農者の定着支援の先進事例や大型農産物直売所見学並びに会員相互の親睦を図るため、京都府南丹農業改良普及センター、JA 京都「たわわ朝霧」を訪問。会員ら14名が出席しました。当日、この冬一番の大雪で2名の会員が出席できませんでしたが、京都南丹方面は小雪がちらつく程度で比

較的に穏やかな天候でした。

京都南丹普及センターでは、轟副所長より当地域の新規就農者の現状、支援策、農業士との連携等について説明を受けました。

京都府では平成14年に担い手養成実践農場事業（府単）を創設。新規就農者の受入農家への補助に加えて、農地を組織的に確保し、研修の実施後、円滑に就農させるため、市町村や府等で組織する連絡調整会議で技術指導する支援農家の選定、後見人、農地、施設・農機具、住宅の斡旋等を調整しています。実践農場で研修する品目は、栽培技術が確立し、販路の安定した京野菜（ミズナ、ミブナ、万願寺とうがらし）が多いとのことでした。また、農業士との連携として、就農サポート講座（座学）や訪問によるアドバイス、研修の受け入れ、その経験者の報告会等を実施していると説明を受けました。

JA 京都直売所「たわわ朝霧」では茨木店長より当直売所の販売状況、売れ筋商品（米粉パン）、手書きポップやレシピア配布による販売促進、品揃え等の苦労話を聞きました。

当協議会では、これらの先進事例を参考に地域の活性化に向けてできることから始めていきたいと思えます。



轟副所長から説明を聴く

4. 農業士、新規就農者との交流

2月15日、伊都振興局において「新規就農者育成と農業士の役割」をテーマに研修会を開催。農業士、新規就農者、市町等の関係者ら36名が出席しました。

初めに、振興局から後継者育成の現状と課題等の説明の後、農業士の廣田哲也氏（橋本市）、狭間祥元氏（九度山町）、山根木弘修氏（かつらぎ町）の順に自身の経営概要、今後の経営方針について発表しました。

廣田氏は、6年間の会社勤め後、28歳で就農。柿や花の施設栽培に取り組み、柿の樹勢の低下やトルコキョウの立枯れ病対策に苦労した事、当面は施設栽培を継続しながら、富有柿を減らし、極早生柿の比率を高めていきたいと述べました。

狭間氏は、大学卒業後、1年間の研修後に24歳で就農。研修で培った技術を生かしてピオーネ栽培を導入。また、就農当初、果樹7品目から徐々に柿中心の経営に転換。今後も味を重視した柿作りで、JA出荷に加えて直売の強化で経営安定を目指したいとしました。

山根木氏は、父の病気を契機に8年間勤めた会社を辞め、30歳で就農。柿、柑橘5品目の複合経営を実践。常雇用で労力確保。省力・軽作業化の設備投資。JA直売所活用。柑橘類の冷蔵貯蔵で出荷期間の延長等でゆとりのある楽しい農業を目指すと話しました。

続いて、玉置会長の進行で発表者3名との意見交換を実施。最初に事務局からアンケート結果を報告しました。農業士の経営においても後継者が少ないこと。農業士の皆さんは、地域の活性化には①人の育成、②儲ける、③交流する等が重要と考えていることを説明しました。

意見交換の中で山根木氏は、雇用し続ける苦労話や若者を雇用しながら技術習得させていることを紹介。新規就農者からは自分の経営内容や困っている事について意見が出されました。また、出席者からは、新規就農者支援について、JA・行政がそれぞれに実施するのではなく伊都管内で1本化した中で農地・農機・住宅等の斡旋、技術支援、研修等ができる環境づくりを進めて欲しい等の意見が出されました。



新規就農者との交流

農業士会支部活動レポート

REPORT

有田地方農業士協議会の活動について

有田地方農業士協議会事務局

有田地方農業士協議会（伊藤 博文 会長）では、生産技術の向上や農業経営の発展、情報交換による会員相互の交流などを目指し、講演会や現地研修会を開催しています。

また、同協議会の女性農業士で組織している女性部会も精力的に活動を行っています。

今回、これら協議会活動の中から、女性部会（酒井 正子 部会長）の活動と有田地方4Hクラブ連絡協議会と合同で開催した現地研修会の取り組みを紹介します。

1. 女性部会の活動

1) 研修会の開催

6月17日、女性部会第1回研修会を開催し、部会員10名が参加のもと、近畿大学附属湯浅農場の見学と有田振興局内での意見交換会を行いました。

湯浅農場の見学では、藤田卓也氏の案内のもと、マンゴー栽培施設及び「柑橘遺伝資源保存園」の見学を中心に、近畿大学の取り組みについて説明を受けました。

その後、振興局会議室で意見交換会を開催し、全体での自己紹介を行った後、3～4名のグループに分かれて日頃の悩みや研修先の希望等を話し合い、最後に各グループから意見の発表を行いました。参加者からは、「私達の作業着はサラリーマンのスーツと同じ。お洒落な作業着があればいいのに」、「外国人のお客さんに対応できるような英会話講座があれば受けてみたい」といった意見が出されました。



グループ別の意見交換

2) 農水省研修生との意見交換会の開催

9月8日、農水省研修生との意見交換会を開催し、部会員6名が参加しました。

当日は、有田郡広川町の地域農業士 長谷氏宅に1ヵ月間の農家研修に来ていた農林水産省 消費・安全局植物防疫課の大原早衣子氏に業務内容等を紹介して頂いた後、意見交換を行いました。

その後は、大原氏とともに昼食を囲み、お互いの地域の紹介等の話に花を咲かせました。



意見交換会

2. 合同現地研修会の開催

9月8日、有田地方4Hクラブ連絡協議会（山本 晃司 会長）との合同による現地研修会を開催し、会員・4Hクラブ員と関係者ら併せて64名が参加しました。

本研修会は、管内の農業生産や農産加工、また地域おこしなどの地域の優良事例を学ぶとともに、農業士・4Hクラブ員相互の交流を図ることを目的に、毎年有田地域内の各市町持ち回りで実施しており、本年は湯浅町内で下記の3事例について研修を行いました。

今回の研修を通じて、地元で頑張っている取り組みを学ぶとともに、会員同士はもとより、地域リーダーである農業士と将来の地域の担い手となる4Hクラブ員との交流も図ることができ、大変有意義な一日となりました。

①湯浅町立山田小学校の食育活動への取組

地元の農業士が地域住民や町内の醤油業者の協力のもと、支援している学童農園での野菜等の栽培や、栽培した大豆を使った醤油づくりなどによる食育活動について説明を受けました。

児童に一連の作業を体験させることで、醤油発祥の地である湯浅町の食文化や農業に興味・関心を持ってもらいたいと話していました。



山田小学校学童農園

②吉川地区営農用多目的給水施設の概要

平成21年度に小規模土地改良事業を活用して施設整備を行い、負担金は中山間地域等直接支払制度の交付金を5ヵ年積み立てて対応した等、施設の概要や設置までの経緯について説明を受けました。今年は夏季の干ばつが問題となったこともあり、参加者は興味深く説明を聞いていました。



吉川地区営農用多目的給水施設

③株式会社 小南農園の取り組み

代表取締役 太田氏から、小南農園の取り組みについて説明を受けました。当社は『田村みかん』にこだわった加工品の製造、販売を行っており、中国、台湾、シンガポールなどへの海外輸出にも力を入れているとのことでした。

参加者からは、パッケージのデザインや海外販売の状況等について、活発な質問が行われました。

最後に有田地方農業士協議会では、会活動を通じて、農業技術の研鑽や農業経営能力の向上、会員相互の交流、農業担い手への指導等を行っています。

今後も、講演会や現地研修会の開催、会員や地域農業の担い手との相互交流など、会活動を活発に行い、農業士の活動から地域農業の振興につなげていきたいと考えています。



株式会社 小南農園

農業士会支部活動レポート

REPORT

日高地方農業士会の活動について

日高地方農業士会事務局

1. 平成 28 年度日高地方農業士会総代会及び研修会の開催

4月14日、日高振興局別館大会議室において、平成28年度日高地方農業士会（松川 嘉之 会長）総代会及び研修会を開催しました。

はじめに、新たに農業士に認定された17名の新会員について紹介が行われました。続いて総代会が行われ、事業や収支の報告、新年度の事業計画（案）や収支予算（案）について議事がなされ原案とおり承認されました。

総会に続き、「農業の適正使用について」「ハウス加温機等からの重油流出事故防止について」及び「電気さくの施設における安全確保について」の研修会が開催され、熱心に受講しました。



農業士認定者の紹介

2. 日高地方農業士会・日高地方花き連合会が「花育」活動を実施

5月12日、日高地方農業士会と日高地方花き連合会（堀池 仁 会長）は、「花育」活動を共催により実施しました。この活動は、管内の小学生を対象に、花に親しみ、触れあう機会を通して、豊かな心を育んでもらうとともに、当地方が全国有数の花の産地であることを知ってもらおうと始めたもので、今年で8回目となります。

花き連合会会員が無償で提供したスターチスや宿根カスミソウ、カーネーション等約7千本の切り花を花束にして、農業士会会員が管内の全33小学校（支援学校含む）全クラスに日高地方の花を紹介したパンフレットとともに届けました。



花の贈呈（南部小学校）



花の講話（江川小学校）

また、全校のうち2小学校（みなべ町：南部小学校、日高川町：江川小学校）において、花束の贈呈式が行われ、生徒を前に両会会員が花束を手渡し、花の豆知識等について講話を行いました。生徒たちは、熱心に話を聞いており、本年度の花育活動も大変好評でした。

3. 海草地方への県内研修を開催（日高地方農業士会女性部会）

7月21日、日高地方農業士会女性部会（山中 紀美子会長）が海草地方で現地研修会を開催しました。

紀美野町の「くらとくり」で、オーナーの北裕子氏から女性起業の取り組み等についてお話を伺いました。続いて、地元の野菜等を中心に使った料理を提供する「もみのき食堂」において、ランチをいただきながら、北氏と意見交換し、交流を図りました。

その後、地元の果物などを使用したジェラートの店「キミノーカ」で、オーナーの宇城哲志氏から「キミノーカ」の概要、加工に合わせた農業や店舗の立地などについて、お話を伺いました。

最後に、海南市のJAながみねファーマーズマーケット「とれたて広場」で、店長の湯川哲志氏から店舗の概要について話を伺い、併せて店舗の見学を行いました。



くらとくりで研修を終えて

4. 第30回地域農業を考える日高のつどいを開催

農業士会、生研グループ、4Hクラブで組織する地域農業を考える日高のつどい実行委員会では、2月28日、南部ロイヤルホテルにおいて「地域で築こう！！花野果な農業 元気な日高」をテーマに「第30回地域農業を考える日高のつどい」を開催し、会員、関係者約130人が出席しました。

基調講演として、和歌山大学経済学部教授大西敏夫氏から「地方創生と地域農業を考える」と題して講演が行われ、日高地域のために多岐にわたりご提言をいただきました。

事例報告として、JA紀州青年部の笹本雅也氏から「母の日参りについて」消費者へのPR活動など、全国展開にむけた熱い想いをお話いただきました。最後に4Hクラブの活動報告として、御坊市、印南町並びにみなべ町各4Hクラブの代表者からそれぞれの活動について報告が行われました。

会員は新鮮な刺激を受け、日高のつどいは盛会のうちに幕を閉じた。



大西教授の講演



笹本氏の報告

農業士会支部活動レポート

REPORT

会員の研鑽と交流を深める活動の実施

西牟婁地方農業士会連絡協議会事務局

1. 西牟婁地方農業士会連絡協議会が総会・研修会を開催

4月13日、西牟婁地方農業士会連絡協議会（谷口 文治 会長）は、紀伊田辺シティプラザホテルにおいて、会員及び行政関係者等約80名が出席のもと、総会並びに研修会を開催しました。

総会では、事業報告及び事業計画（案）とともに原案のとおり承認された。

研修会では、株式会社プラス 代表取締役社長 野田正史氏（田辺市）から、「生産者と消費者をつなぐ民間農水産物直売所！」と題して、現在県内に11店舗、大阪府と奈良県内で各3店舗の計17店舗を展開する直売所「よってって」の取組について講演がありました。

直売所の使命は、生産者と消費者の橋渡し役となって地産地消を推進することで、新鮮・安心・安価な地場産品を通じて日本農業の活性化に貢献するとともに、豊かな食生活をお客様に提供することができることでした。

また、直売所に出荷する生産者の優良事例や、消費者とのふれあいの場づくりとしてイチゴ、ミカンの収穫体験、田植え体験等のイベントを実施していることが紹介されました。

総会・研修会後の意見交換会では、野田氏の講演での提案を参考とし、活発な意見交換が行われました。



研修会（講師：野田正史氏）

2. 関係団体とともに“第25回SUN・燦紀南農業者の集い”を開催

8月29日、紀伊田辺シティプラザホテルにおいて、「とどげ！農産物の魅力とこの熱き想い」をテーマにSUN・燦紀南農業者の集い（主催：SUN・燦紀南農業者の集い実行委員会）が開催され、生産者や関係者約100名が出席しました。

この集いは西牟婁地方の農業士会、4Hクラブ、生活研究グループ主催により年1回開催され、今年で25回目となる。西牟婁地方の農業者が、地域の課題や農業農村の今後について検討・交流することにより、地域農業の発展、地域の活性化につなげることを目的としています。

研修会では、国際フルーツ協会代表の中野瑞樹氏を講師に招き、「フルーツの持つ役割と将来展望」と題して講演が行われました。

中野氏から、「果物を食べ過ぎると体に悪いという人がいるが、そんなことはない。糖分はご飯よりも少ない。フルーツは血糖値を上げにくい食品です」と話があり、WHO（世界保健機関）が糖尿病、がん、心臓疾患、肥満予防のために、フルーツと野菜を合わせて、1日400g以上の摂取を進めていることや、農林水産省が毎日くだもの200g運動を展開していることを紹介した。しかし日本の摂取量が140gと先進国最下位となっており、特に20～40代の摂取量が少ないと説明がありました。また、今年3月に農研機構果樹研究所が温州みかんの摂取が糖尿病や肝炎、高脂血症予防に効果があるとの発表を行ったことにもふ

れ、果実消費拡大のきっかけとしなければと話がありました。

その後、今年4月に設置されたJAグループ和歌山農業振興センターについて農業振興センター西川部長から業務等の説明がありました。



谷口実行委員長（農業士会長）開会挨拶



フルーツをカットする中野講師

3. 西牟婁地方農業士会女性部会が梅の消費拡大活動を実施

10月8日、西牟婁地方農業士会連絡協議会女性部会（岩間 光代 部会長）が、大阪府立堺東高校で梅の加工や食べ方に関心のある高校生の親を対象に、梅の消費拡大を目的とした座学と調理・加工実習を実施しました。座学では、生産量や品種、梅干になるまでの作業について説明した後、加工品や機能性について説明しました。

調理実習は白干梅のひじき炊き込みごはん、サバの梅煮、梅酢から揚げ、梅ドレッシングのサラダ等を6班に分かれて行いました。交流を図るため、部会員は各班ごとに分かれて指導しました。

参加者からは、「こんなに梅がおいしいものとは思わなかった」「家に帰ってからもう一度作り、家族に食べさせたい」「来年6月が待ち遠しい」「息子がスポーツをしているので、ドリンクとして梅を使いたい」と大好評でした。

今後も女性部会では、関係団体や関係機関と連携しながら、梅の魅力を消費者にPRし、消費の拡大につなげていきたいと考えています。



梅の生産量、機能性、栽培のお話



真剣なまなざしの参加者



交流を深める部会員

農業士会支部活動レポート

REPORT

東牟婁地方農業士会の活動について

東牟婁地方農業士会事務局

1. 農業士「食育」ナス収穫体験を支援

新宮周辺地場産青果物対策協議会（小田 三郎 会長）が、9月6日那智勝浦町立勝浦小学校3年生45名、9月12日同立宇久井小学校3年生31名を対象に那智勝浦町南大居にて食育授業でナス収穫体験を開催しました。

「太田のナス組合」（松本 安弘 組合長）の組合員である農業士2名、農業士OB1名が講師となり、ナスの特徴や栽培方法について説明をした後、児童達は収穫するナスの大きさやハサミの使い方を聞き、収穫作業を行いました。

両日とも時折小雨が混じる天候でしたが、児童達はほ場内に散開し、大きなナスを1人5個収穫しました。

収穫後、JAみくまの太田営農センター集出荷場で、農業士等が指導する中、各児童が収穫した中から3個のナスを選び、事前に児童が思い思いの言葉を書いたポップとともに袋詰めされました。

その後、児童達から「どんな虫が付きますか?」「ナスを作っていて、うれしいことは何ですか?」など多くの質問が出され、農業士等がそれらの質問に答えていました。

新宮公設市場からナスの流通について説明があり、近隣の小売店などで販売されることを知って驚くとともに、農業について関心を深めていました。

2. 東牟婁農業青少年クラブ連絡協議会と共に農産物即売会の実施

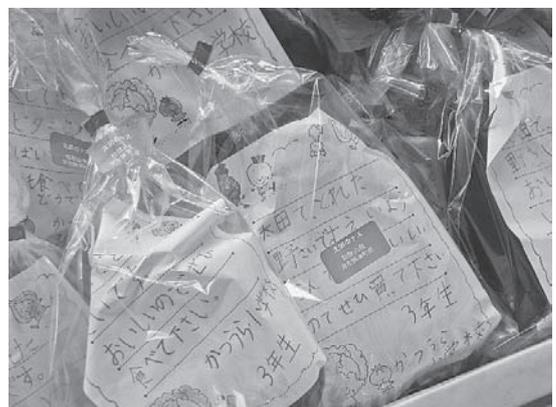
11月26日、第40回那智勝浦町農産物品評会会場の那智勝浦町体育文化会館において東牟婁農業青少年クラブ連絡協議会（石田 大士 会長 以下、4Hクラブ）と共に



ナスを収穫中



袋詰めを指導する農業士



袋詰めされたナス

農産物即売会を実施しました。

当日は、東牟婁地方農業士会 松本副会長はじめ、地域農業士、青年農業士、4Hクラブ員は、早朝から会場である体育文化会館の屋外会場において、農産物や加工品の搬入、テントの設営などを行いました。

天候にも恵まれ、来場者も多く、即売会場のテントには多くの人たちが訪れ、会員が栽培した新鮮な農産物や加工品を買い求めていました。



即売会

3. 4Hクラブ、普及指導協力委員との合同研修会を開催

12月2日、那智勝浦町太田地域において、地域づくり及びイチゴ高設栽培研修会を開催し、農業士、4Hクラブ員、普及指導協力委員ら関係者20名が出席しました。

交流センター太田の郷（平成28年4月開所、以下、太田の郷）内の太田川のめぐ味において、太田地域で収穫された野菜を活用したバイキング形式の昼食を食べました。その後、太田の郷において太田寄合会会長の大江清一氏から、地域の歴史、太田寄合会の発足、旧太田中学校活用を中心とした過疎地域等集落ネットワーク形成支援事業の取組について説明を受けました。また、太田の郷管理人の石田一氏から開所前、開所後の苦労話を交えながら管理・運営や介護予防事業プログラムなど取組について説明を受けました。

那智勝浦町南大居のイチゴ栽培ほ場において、園主の杉浦仁氏から栽培概要や和歌山県方式高設栽培施設の導入状況について説明を受けました。

この研修会を通じて、参加者らは高齢化、後継者不足、鳥獣被害増加など同様の課題があり、農業振興並びに地域活性化に取り組むうえで、多くヒントが得られた研修会でした。



太田川のめぐ味のバイキングランチ



大江会長より説明を受ける



イチゴ高設栽培施設で研修中

地域の逸品!!

「八旗農園」のモモ加工品 ～桃山町から全国に発信～

紹介者

紀の川市 地域農業士

中 浴 泉

1. 商品の紹介

●特徴

「あら川の桃」の生産者が自ら育てた朝採り桃をその日のうちに丁寧に処理し、繊維質を残しながら裏ごしした桃ストレートピューレとジュースです。

桃本来の風味と香りを楽しめます。

●作られた背景

従来から、桃本来の味には何ら問題がないのに規格外品については全て廃棄処分していました。

桃農家が1年通じて丹精込めて栽培した桃を廃棄せず、何とか付加価値を付けて有効利用する方法がないかと模索した結果、桃の風味と香りを100%活かせる桃ストレートピューレとジュースへの加工に繋がりました。

●まつわるストーリー

紀の川沿岸が果樹王国であり、また「あら川の桃」が全国有数の桃生産地であるにも関わらず全国的には知名度が低く、商品の良さが全国に認知されていませんでした。

桃の生果の販売はもとより、一年を通して桃ピューレ、ジュースの販売が可能となり、地方から全国に向け情報発信することにより需要の拡大と供給を行いたいと考えています。

2. お問い合わせ先等

株式会社八旗農園（はっきのうえん）

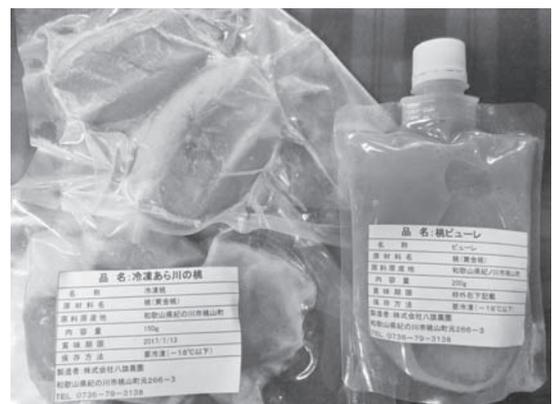
〒649-6122 紀の川市桃山町元266-3

TEL 0736-79-3138 FAX 0736-79-3137

E-mail hakki@bh.wakwak.com



桃ジュース



冷凍桃（左）及び モモのピューレ（右）

地域の逸品!!

昔ながらの伝統野菜

「湯浅なす」

紹介者

湯浅町 地域農業士

瀬 〇 琢 也



湯浅町では、昔から各家庭で金山寺味噌（おかず味噌）を作る習慣がありました。金山寺味噌の仕込みには、湯浅町の固有種である「湯浅なす」が活用されてきました。

1. 商品の紹介

湯浅なすは、最大 400g 以上にもなる大型の丸なすです。肉質がとても緻密で、金山寺味噌に加工しても型崩れしないのでメインの具材として最適です。

また、湯浅なすは、火を通すと「トロ」のように柔らかくなるので、金山寺味噌への利用以外にも、調理方法によって様々な食感を楽しむことができます。

湯浅なすは、樹勢が弱く、収量もとれないので、一時はほとんど作られなくなっていました。昔ながらの伝統野菜を守るために、地元農家を中心に栽培を始め、現在は湯浅町・有田川町で 8 戸の農家で栽培されています。

また、伝統野菜を地域の子供達にも学んでもらうために、地元小学校では、湯浅なすの栽培から金山寺味噌の加工まで食育活動に取り組んでおり、地元の農業士は栽培の支援をしています。



湯浅なす栽培の様子

2. 販売先等

湯浅なすの青果は、県内、大阪南部の大型量販店や地元直売所で販売（7～10月）しているほか、湯浅町のふるさと納税の返礼品としても登録されています。

湯浅なすの金山寺味噌は、湯浅町内の販売店等で購入することができます。

昔ながらの伝統野菜「湯浅なす」、まだまだ生産量は少ないですが、見かけたら是非食べてみてください！



湯浅なすの果実

地域の逸品!!

「ベリー倶楽部」の 手作りブルーベリージャム

紹介者

田辺市 地域農業士

竹内 明子

1. 商品の紹介

平成16年より、女性8名でグループ「ベリー倶楽部」を結成し、ブルーベリーの栽培を始めました。メンバーは、途中入れ替わりがあり、現在は7名です。その栽培したブルーベリーをたくさん使って、私たち自ら手作りしたのが、このブルーベリージャムです。

ブルーベリー、クラニュー糖、レモン果汁のみで作っています。素朴な味のほんまもん!

「紀采館」「よってって稲成店」「海老せんべい南紀」「とれとれ市場」「コーナン上富田店」にて販売しています。

価格は、580円(税込み)です。是非ご賞味下さい。後、冷凍のブルーベリーも1kgで1,800円(税込み)にて販売しています。



ブルーベリージャム



ベリー倶楽部 (竹内明子さん: 右前)

2. 摘み取り体験

ベリー倶楽部のブルーベリー園では、摘み取り体験も行っています。毎年7月1日から7月31日までの期間で、要予約です。

入園料 大人 1,000円 (ブルーベリー 1kg お持ち帰り分つき)

小学生以下 500円 (ブルーベリー 500g お持ち帰り分つき)

3. お問い合わせ先等

「ベリー倶楽部」

代表 竹内 明子

〒646-0213 田辺市長野 185 番地

TEL 080-1432-7398

農業士認定事業について

県農林水産業のリーダーを認定 ～ 平成 28 年度認定式を開催 ～

和歌山県農林水産部経営支援課

2月16日、和歌山市内で平成28年度の認定式を開催しました。

本式典では、県農林水産業の中核的な担い手で、リーダーとして活動している78名（うち農業士は67名）の方々に認定証を交付しました。今回の認定によって、県内の農業士は834名となりました。

式典で、知事は「担い手が頑張らないことには発展しない。一番の中核である皆様に心から期待を申し上げる」と述べて激励しました。これに対し、みなべ町の指導農業士 岡田敦雄さんが認定者を代表して「地域の先頭に立ってより一層努力します」と決意を表明されました。



知事から認定証を交付

また、今年度で定年を迎えられる等の指導農業士26名の方々には感謝状が贈呈されました。今回、農業士の認定を受けられた皆様、感謝状を受け取られた皆様は次のとおりです（敬称略）。



長年にわたり活躍された指導農業士へ感謝状を贈呈

農業士認定者の皆様 67名

指導農業士認定者 18名

氏名	市町村名
飯田 勝	紀の川市
山田 真司	紀の川市
長谷川 美枝	紀の川市
亀井 裕司	岩出市
山本 勝彦	橋本市
鳴川 耕平	有田市
富上 将基	湯浅町
伊藤 雅秋	広川町
西岡 嗣郎	広川町

氏名	市町村名
森田 耕司	有田川町
林 敬子	有田川町
宮本 浩樹	みなべ町
岡田 敦雄	みなべ町
山崎 真一	みなべ町
芝峰 理恵子	田辺市
山下 優	田辺市
泉 孝志	田辺市
麩 充	上富田町

地域農業士認定者 30名

氏名	市町村名
西村 吉史	和歌山市
井辺 耕平	海南市
川端 宏幸	海南市
青柳 基	紀の川市
木村 陽作	紀の川市
畠山 武	紀の川市
秦野 欣也	紀の川市
新田 芳久	橋本市
田中 里美	橋本市
新岡 愛	かつらぎ町
栗山 善作	有田市
川島 学	有田市
石井 琢也	有田市
近藤 弘一	湯浅町
三枝 孝裕	有田川町

氏名	市町村名
森 誠	有田川町
日茂 健夫	有田川町
花田 直季	有田川町
龍神 茂	美浜町
数見 隆一郎	由良町
里地 芳卓	由良町
榎本 勇一	印南町
橋本 智和	印南町
清水 俊夫	日高川町
湯川 弘幸	日高川町
宮崎 孝行	田辺市
番平 奉文	田辺市
鈴木 寿志	田辺市
山口 明宏	上富田町
楠本 隆晃	上富田町

青年農業士認定者 19名

氏名	市町村名
中山 雄太	和歌山市
南方 一樹	和歌山市
厚地 恵太	紀の川市
青柳 郁男	紀の川市
青柳 佑幸	紀の川市
小川 信久	紀の川市
原野 つよし	湯浅町
太田 祥元	湯浅町
浦 将也	広川町
嶋田 悦也	有田川町

氏名	市町村名
西 一馬	みなべ町
藤川 雅史	みなべ町
坂口 雄大	みなべ町
皿田 竜一	田辺市
玉置 貴啓	田辺市
栗山 修一	田辺市
鈴木 洋一	田辺市
田上 貴之	上富田町
数本 晃佑	上富田町

感謝状を受けられた皆様 26名

氏名	市町村名
小栗 啓司	和歌山市
秦野 吉史	海南市
深海 和子	海南市
浴 啓造	紀美野町
森本 隆弘	紀美野町
山名 和章	紀の川市
厚地 美穂	紀の川市
小川 しず	紀の川市
赤井 正良	岩出市
三浦 昌子	橋本市
久保 隆平	かつらぎ町
阪本 勲	かつらぎ町
小柳 好秀	かつらぎ町

氏名	市町村名
山根木 弘修	かつらぎ町
海堀 哲司	九度山町
玉置 秀次	九度山町
山崎 佳彦	有田市
村田 行雄	湯浅町
藤岡 辰夫	有田川町
中西 敦子	広川町
西 定吉	みなべ町
山本 茂	みなべ町
藤川 忠男	みなべ町
船本 幸雄	田辺市
桐本 久子	田辺市
宮本 正信	田辺市

農業関係制度の紹介

収入保険制度について

和歌山県農業士会連絡協議会事務局

1. 「収入保険制度」とは

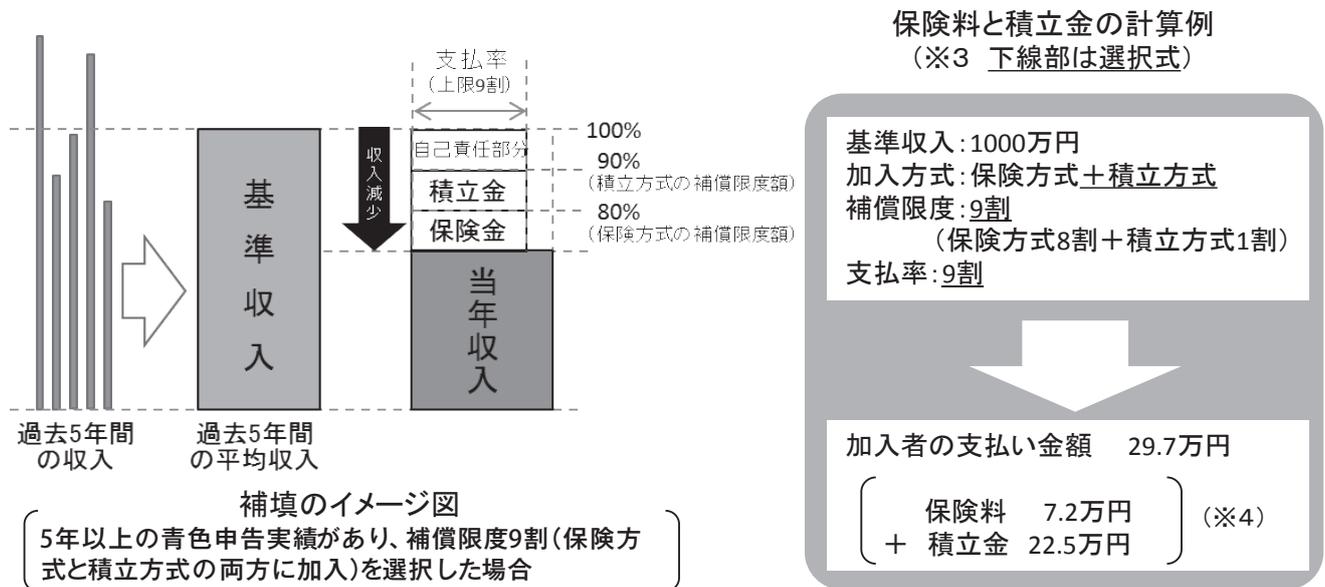
「品目単位」ではなく、「農業経営全体」を対象とした、任意加入の保険制度です。自然災害による収量減少だけでなく、価格低下なども含めた収入減少が補償対象です。現在、平成30年度の加入申請開始に向けて、国等が準備を行っています。ここでは、平成29年2月時点で公表されている内容を紹介します。

2. 対象者は「青色申告を行っている農業者(個人・法人)」です

対象者は、5年以上の青色申告実績がある農業者です。ただし、青色申告(簡易な方式を含む)の実績が、制度加入時に1年分あれば加入できます。なお、その場合の補償限度額は、申告実績が5年になるまで徐々に引き上げていく等の措置が検討されています。

3. 補償の内容

当年の収入が、基準収入(※1)の9割(5年以上の青色申告実績がある場合)を下回った場合に、下回った額の最大9割(支払率(※2))が補填されます。



- ※1 基準収入とは、農業者の過去5年間の農産物(加工品は対象外。ただし、税法上農業所得として扱われる「精米」「梅干し」などは対象)の販売収入の平均を基本とし、規模拡大など当年の営農計画等も考慮して設定します。
- ※2 補償限度額及び支払率は、複数の割合から選択できます。
- ※3 加入は「保険方式」と「積立方式」があり、積立方式は選択により加入しないこともできます。なお、保険方式は1年ごとに掛捨てですが、積立方式は補填に使われない場合翌年に持ち越すことができます。
- ※4 保険料 = 基準収入 × 補償限度(0.8を上限に選択) × 支払率(0.9を上限に選択) × 保険料率(1%)
積立金 = 基準収入 × 積立幅(10%) × 支払率(0.9を上限に選択) × 1/4

4. 今後の情報にご注意を!

制度の名称や内容は変更されることがあります。今後の情報に注意してください。

(参考) 農業士について

昭和 51 年から県知事が認定している制度。

地域農業の振興と農村の活性化にリーダー的役割を果たしている農業者に対し、付与される称号。「指導農業士 (65 歳まで)」「地域農業士 (60 歳まで)」「青年農業士 (40 歳まで)」の3つの区分がある。

平成 29 年 3 月現在の認定者数は以下の通り。

指導農業士	152 名 (うち女性	24 名)
地域農業士	537 名 (うち女性	52 名)
青年農業士	145 名 (うち女性	1 名)
合 計	834 名 (うち女性	77 名)



表紙の人

海南市 指導農業士

深海 和子さん

深海さんは花き、水稲の複合経営を行っています。早くから直売に注目し、20 年以上前に我が家の直売所での販売を始めました。

現在は JA ながみね農産物産直所の「とれたて広場」で販売しています。

本年度、和歌山県農林水産業賞を受賞されました。

和歌山の農業士 第 8 号

発行日：平成 29 年 3 月

編 集：和歌山県

和歌山県農業士会連絡協議会

印 刷：有限会社 阪口印刷所



和歌山の 農業士

和歌山県
和歌山県農業士会連絡協議会

